

盟友、近角常観と久保猪之吉 —求道会館に残された書簡をめぐって¹⁾

三 宅 正 隆

- 1 はじめに
- 2 近角常観と久保猪之吉の出会いと絆
- 3 近角常観：学生時代の仏教青年会運動
- 4 久保猪之吉の学生時代
- 5 久保猪之吉の歌人としての活動
- 6 ベルリンへの報告書簡：常音の入学試験
- 7 久保猪之吉の人生の転機
- 8 おわりに

1 はじめに

明治から昭和にかけて活躍した真宗大谷派の僧侶近角常観は1900（明治33）年4月、東本願寺から西洋宗教事情視察の命を受け、米国へ旅立った。小雨の中横浜埠頭には多くの見送りの人々が詰めかけたが、その中に弟常音や友人久保猪之吉の姿もあった。近角常観は日本を離れるにあたって、ちょうど高等学校の受験期にあった異母弟常音の世話、監督をこの久保猪之吉に託していた。

当時久保猪之吉は東京帝国大学医科大学医学科の4年生で、卒業試験を間近に控えていた。一方、近角常観は少し前に同じ帝国大学の文科大学哲学科を卒業し、宗教法案反対運動など宗教運動に奔走していたが、この年法案も貴族院で否決され、一応の成果を見届け、友人池山栄吉とともに渡欧への途についた。

常観から留守中異母弟常音の世話、監督を任された久保猪之吉は、将来は「耳鼻咽喉科学会の日本の鼻祖」と医学界に大きな足跡を残すことになるが、この頃は学業のかたわら、歌人で国文学者でもあった落合直文が結成した「あさ香社」に参加し、その後「いかづち会」を立ち

上げるなど、新進気鋭の新派歌人としても多忙な毎日を送っていた。

近角は2年のドイツ留学を終え帰国すると、東京本郷に求道学舎を建て、信仰活動に打ち込む。一方、久保は近角と入れ替わるようにドイツのフライブルグ大学へ留学に発ち、帰国すると京都帝国大学福岡医科大学の教授として九州へ赴任し、日本の耳鼻咽喉科学の礎を築く一人となった。このようにこの二人は学生時代から、近角は宗教哲学を学ぶ宗教活動家、久保は医学生で歌人という全く異なった専門分野で活動を続けていたが、彼らの間には二人を近づけ、互いに親交を結ぶ共通点があった。一つは彼らの家庭環境や境遇が似ていたこと。二つ目としては、彼らの学生時代はちょうど日清戦争から日露戦争の間にあり、日本でもナショナリズムの風潮が高まり、「革新」の嵐が吹き荒れた時でもあったが、二人はそれぞれの分野でこの革新運動に関わっていたことである。

近年、近角常観については岩田文昭による『近代仏教と青年—近角常観とその時代』、また久保猪之吉については柴田浩一の『評伝 耳鼻咽喉科のパイオニア久保猪之吉』と兩人についての「評伝」が出版された²⁾。しかし、いずれにも二人の互いの交流について触れた箇所はない。しかし、常観と久保は旧制一高時代に知り合い、東京帝国大学時代には、一時同じ下宿で共同生活を送っていた仲でもあった。二人は学業のかたわら、それぞれ違った分野で革新運動にも関わったが、同時にこの時期は欧米視察に出かけた常観だけでなく猪之吉にとっても将来を決定づける様々な出来事が起こり、いわば人生の転機となった時期でもあった。その中で、二人は互いに助け合い、また同時に互いを刺激し合ってそれぞれ新たな一步を踏み出すことになる。このように、彼らの親交は「評伝」としても欠くことのできない側面と言える。

これまで二人の関係、交流に関する詳しい研究はなされていないと言ってよい。ところが、近年、久保猪之吉の近角常観に宛てた書簡類が、常観が宗教活動の基点とした東京の求道会館に残されていたおびただしい数の書簡の中から見つかった³⁾。手紙には、受験勉強に励む常観の異母弟常音の近況に加え、久保自身の近況や悩みなども打ち明けられ、また常観に将来についての助言を求める文句などが書かれ、この書簡類は二人の関係を知る上で貴重な資料と言える。

久保猪之吉の生い立ちや経歴、業績などについてはこれまでも多く公表されているが、ほとんどは久保自身の回顧談や医学関係の弟子、友人たちの証言をもとに書かれたもので、ある意味で公表を前提にしている資料である。しかし、近角に宛てて書かれた久保からの私信には、当時の猪之吉の個人的な心情がそのままにじみでていて、従来知られなかった久保猪之吉像が浮かび上がる。

以下この評論では、近角常観の外遊中に久保猪之吉から送られた書簡を中心に二人の関係や互いに与えた影響について考察する。書簡の内容は当然ながら発信人の久保に関わる出来事が中心となる⁴⁾。したがって、考察の対象は主として久保猪之吉と彼との付き合いを通した近角

盟友、近角常観と久保猪之吉—求道会館に残された書簡をめぐって（三宅）

常観像ということになる。また、書簡のほとんどは近角の外遊地ドイツベルリンに出されたものであることから、大体はこの時期の出来事に限られる。しかし、この時期は彼らのその後の人生の方向を決める極めて重要な出来事が起こった時でもあり、この点に関わる研究は、両者の評伝の一部として意義がある。

まず近角常観が欧米視察に発つまでの二人の略歴について、特に久保の医科大学での学業と歌人としての活動を中心に解説し、その後で二人の出会い、そして常観らに出された書簡や雑誌、新聞などへの投稿記事に言及しながら、久保の交友関係や医局時代、結婚、留学など、福岡へ赴任するまでの出来事を追う。

2 近角常観と久保猪之吉の出会いと絆

近角常観や久保猪之吉の生い立ちについては、岩田や柴田による前掲書に詳しいが、ここでは特に二人の接点にかかわる出来事について触れる。二人の出会いについては久保自身「兄は江州琵琶湖畔の人、我は東奥安達太郎山下の産。相知るにいとしも奇縁なり」とその不思議さを振り返っているが⁵⁾、この「奇縁」はどのようにして生まれたのであろうか。

常観は1870（明治3）年に現滋賀県長浜市湖北町延勝寺にある浄土真宗大谷派西源寺の長男として生まれた。この辺りは湖北と呼ばれ、琵琶湖東側の北端に近いところに位置し、すぐ前には琵琶湖に浮かぶ日本三大弁天の一つ竹生島神社のある竹生島が見え、辺りには野鳥が飛び交い、夕暮れ時には多くの写真家が落日風景をおさめに集う有名スポットでもある。この琵琶湖畔の小さな村はいわゆる真宗地帯とも呼ばれる地域で、篤信的な真宗門徒が多く暮らし、常観はここで京都府尋常中学に進むまでの日々を送った。中学を卒業すると、当時再開されたばかりの東本願寺の留学制度によって1889（明治22）年に上京し、第一高等中学校予科から本科に進み、1895（明治28）年に東京帝国大学文科大学哲学科に入学した。

一方、久保猪之吉は日本百名山の一つ安達良山の近く、福島県旧二本松藩士久保常保の子として1874年12月に生まれている。近角より4歳下になる。福島尋常中学を卒業後上京して、やはり第一高等中学校（後第一高等学校へ改称）へ入学し、東京帝国大学医科分科大学の医学科に入学する。1896（明治29）年のことで、近角はこの時東京帝国大学文科大学2回生で、学年としては一年違いであった⁶⁾。

従来の研究では近角常観と久保猪之吉の交友関係について言及したものはほとんど見当たらないが、若干触れられている資料として、杉野大沢の「医人文人あれこれ 長塚節と久保猪之吉」がある⁷⁾。そこに見られる「教授（久保）の宗教心が早く実母と生別した少年時の多大なる苦難にあつたことは想像できるが、その一高より大学時代を通じてのそれは、教授が心友或は道友とよんでいる近角常観師との親交にあつたのである」と久保の宗教心について言及して

いる箇所がそれである⁸⁾。この他に公表されたもので久保と常観の交友について触れられているものには、『明星』に発表された久保自身による「『ベルリン』の友を憶ふ」がある。これについては後でまた触れる⁹⁾。

上の経歴からも察せられるように、常観と久保の出会いは第一高等学校にあった。当時の旧制高等（中）学校は帝国大学の予科的な性格を持ち、ほとんど全員が無試験で帝大に進学できる、いわば一貫教育制度と言える性格のものであった。したがって、ほぼ10年という長きにわたって二人は一緒に学生生活を送ることになり、次第に友情を深めていったと思われる¹⁰⁾。

二人が入学した旧制一高には1890年に自治寮ができ、原則全寮制で少数の生徒が自治・自立的な共同生活を送り、友情を育てる環境が生まれていた¹¹⁾。加えて、一高寮内には色々な私的団体も結成されていて、その一つに帝大学生と一緒に作った仏教青年会の「徳風会」があり、常観もその会員に加わった。寮生は勉学以外にも広い分野に興味を持ち、互いに議論を交わし、友情を深め、刺激し合ったので、このような学科を超えた交流が日常的にあったことも、二人が接近したことにつながり、久保も近角らに影響され、宗教運動にも興味をいだいていったと思われる。

もう一つ二人を近づけ、互いの友情を深めた要因として、二人の家庭環境、境遇にも注目すべきであろう。二人は幼くして実母と別れ、いわゆる継母に育てられた。そして、二人とも生涯その母には実母と変わらぬ感謝と孝養を尽くした。加えて共に年の離れた異母弟を持つ。そして、親身になって弟達が一人前になるまで世話をやいた。また、二人とも地方出身で長男であることから、卒業後も親の世話もあり、それぞれ革新運動に関わりながらも、絶えず郷土のことに気を配る生活を余儀なくされていた。幼い頃から貧困と向き合わなければならなかったことも二人に共通した試練であった。このように互いの境遇も似かよっていたことから、互いに強い連帯感や信頼感が生まれ、常観が欧米に発つにあたっては、猪之吉に異母弟常音の面倒を頼み、またその数年後今度は猪之吉が留学した際には、やはり異母弟護躬を常観に託したのであろう。

二人の関係で決定的なことは、二人が帝大時代に一時同宿していたという事実である。二人の寄宿先は東京本郷区駒込の正念寺、俗に桜観音と呼ばれていた寺である。この場所は、猪之吉が和歌の革新運動の母体ともなる「いかづち会」を立ち上げたことで和歌や俳諧の世界ではつとに有名であるが、実はこの正念寺で久保は近角常観と一緒に自炊生活を送っていたのである。地方から上京した学生2人がこの場所で、貧困に喘ぎながらも互いに助け合い、深い友情を育てていったわけで、特別な思い出の詰まった場所であった。

このころの二人の生活について、「『ベルリン』の友を憶ふ」に久保が書き留めている一文がある¹²⁾。この「『ベルリン』の友を憶ふ」は、和歌革新運動の同志でもあった与謝野鉄幹が主催する団体の機関紙『明星』に発表されたもので、異国に旅立ち、離れ離れに暮らす友常観を

盟友、近角常観と久保猪之吉—求道会館に残された書簡をめぐって（三宅）

憶い、慕う文が連ねられている。

欄干に凭れて庭上を眺むれば夕の風の吹くとも無きに散り来る花の果てをしらぬよ。その花を真袖に受けて春の一夜を相泣きしその友、駒込の僧庵に一隅を借りて一鍋の粥に相活きし其友、事あれば先ず計り一の秘密を有せざりしその友、今は日本にあらず。危き我何ぞ懐古の涙にたへむや

後でも詳しく述べるが、この1900年前後、つまり久保の帝大卒業前後にあたる時期は将来の進路に対する不安もあり、猪之吉からの書簡にも常観を頼る文言が並ぶ。そして、互いに忙しい中でも、書簡のやり取りが続いた。こうして二人の出会いから次第に信頼関係を築き、猪之吉も常観を「兄」と慕うようになった。

次に、常観と猪之吉が関わった改革運動を中心に二人の学生時代について検証し、二人の交友関係が具体的にどのように築かれ、また彼らを取り巻く人々とどのように関わっていたのかを確認することにする。

3 近角常観：学生時代の仏教青年会運動

明治維新に仏教界は新政府による神道国教化政策を始め廃仏毀釈など様々な弾圧を経験し、同時にキリスト教解禁による危機感などから、伝統的な教団組織改善と近代的再生を目指して、仏教復興に向けた運動を繰り広げた。その一端にいわゆる仏教青年運動とも呼べる運動があり、常観も第一高等中学時代から仏教青年会や徳風会に参加し、学生らによる仏教覚醒運動に積極的に関わっていた¹³⁾。特に帝大時代には清沢満之等の推進した、いわゆる「白川党宗門改革運動」と呼ばれる真宗大谷派の教団改革運動に参加するも、その直後、近角は深刻な煩悶状態に陥り、「精神異常を来し常識を欠くに」まで追い詰められた。「友皆望を失ひし」と同士、友人との葛藤に苦悶の日々を送ったが、「わが真の朋友は仏陀である」と、仏陀の慈悲と守護に目覚め、「回心」を体験し、これを機に「心神の活力古に倍」し、特に欧米留学後は本郷に建てた求道学舎を中心に、精力的に全国を巡り、若者や信者に熱く信仰を説き続けた。このころの常観を間近に見ていた久保が当時を回顧して、『『ベルリン』の友を憶ふ』に次のように書いている¹⁴⁾。

兄、さきにおのれと自炊せし頃より当代宗教家の腐敗を憤き人心の哀頹を悲み、献身的の事業に一身を委せむと期しき、仏教界は兄が大学卒業の日まで待ちえざりき。兄をして事に当らしむるにいたれり。傷むべし兄は為に精神異常を来し常識を欠くにいたりぬ。友皆

望を失ひしが仏陀の守護とやいは無、未だ一歳を経ずして快癒に就き心神の活力古に倍せり。

しかしながら、新生日本を取り巻く宗教的情勢もめまぐるしく変化する中、伝統的な仏教界の体質はすぐには良くはならなかった。常観は、公認教制度の実現と、貴族院に提出された宗教法案に対する反対運動の先頭に立って、帝大2年の時大日本仏教青年会に参加し、ほどなく大日本仏教徒同盟会を組織し、その機関紙の主筆者として全国的な運動を展開する。常観は大学を卒業するとそのまま大学院に進学し宗教哲学を研究するかたわら、国の宗教政策に対して反発し、抗議行動を続けた。当時大学院には姉崎正治、藤岡勝二、吉田静致、朝永三十郎、常盤大定ら後同時期にドイツに留学したり、宗教活動を共にする友人、同志たちが多く在籍していた¹⁵⁾。しかしながら、常観は研究者としての将来像は描いてはいなかった。彼は欧米の宗教制度や国家と宗教との関係などの研究成果を踏まえながら、引き続き全国規模での仏教活動を繰り広げた。その模様を、久保は次のように記している¹⁶⁾。

卒業後大日本仏教徒同盟会を組織し、大学その弊を改めて世道人心の基礎を確立せむと力めたり。宗教法案の表るゝに及びてその運動の烈しきに至りしかば忌憚にふれ大学院退学を命ぜらる。兄屈せず撓まず、遂にその素志を貫きたり。

大学院の退学について、久保は大学の「忌憚にふれ大学院退学を命ぜらる」と書いているが、岩田はその著書で、心理学者で帝大で教鞭を執る元良勇次郎との関係について触れ、彼の取り計らいで「常観は、電話にて大学から注意があったと聞くなり、すぐに退学届を出した」と、常観が「穏便に」自主退学できたことを指摘している¹⁷⁾。何れにせよ、常観の大学院退学は関係者の内では周知の事実であったようである¹⁸⁾。常観の大学院退学は公式にも『帝国大学一覽』の大学院名簿で確認できる。明治31-32年、32-33年の大学院名簿には近角常観の名前はあるが、32年9月末現在の名簿を最後に近角常観の名前はない。このように、結果的には宗教法案の反対運動に打ち込んだため大学院を退学することになったが、真宗大谷派本願寺からは反対運動への貢献が認められ、欧米視察の機会が与えられることになった。2年に渡る留学から帰ると久保猪之吉もすでに医者道の道を歩き始めていて、さらには留学、また福岡への転居と次第に常観との関係も以前と同じようにはいなくなっていた。

4 久保猪之吉の学生時代

耳鼻咽喉科医としての久保猪之吉については、多くの弟子や同僚たちが、機会あるごとにス

盟友、近角常観と久保猪之吉—求道会館に残された書簡をめぐって（三宅）

ピーチや思い出の記として語っていたり、また医学会誌などに掲載された記事も多い。しかし、当然のことながら、個人的なことについては知られていないことも多くある。ここでは生涯片腕として支えることになる恩師岡田和一郎氏との関係を中心に、久保の学生時代や医局時代について概観し、常観との交友関係について確認する。

久保猪之吉の経歴を語る際、しばしば「明治29年東京帝国大学医科大学に入学、耳鼻咽喉科を専攻」などと紹介されるが¹⁹⁾、これはあまり正確な説明ではない。久保が東京帝国大学医科大学に入学した頃はちょうど日本では耳鼻咽喉学の黎明期とも言える時代であって、帝大にはまだ耳鼻咽喉科の講座はなかった。

日本における耳鼻咽喉科学の立ち上げは、明治25年にドイツから帰朝した金杉英五郎が東京市内の病院で診療を始めながら同志数名と耳鼻咽喉科会を創立したことから始まった²⁰⁾。続いて明治29年、金杉に先立ってドイツのチュービンゲン大学で耳鼻咽喉科学を学んだ久保猪之吉の母方の叔父にあたる小此木信六郎も相次いで帰国し、病院を創設し、夜間講習会などを始め、次第に耳鼻咽喉という医療の分野も一般に認知され始めた。

東京帝大の医科大学で耳鼻咽喉科の講座が開設されたのは1898（明治31）年11月で、最初の耳鼻咽喉科の助教授として任ぜられたのは岡田和一郎助教授であった。当時は耳鼻咽喉の治療も外科の一部として行なわれていたこともあって、岡田も外科の専門医であった。帝国大学で耳鼻咽喉科新設の計画が浮上すると、岡田はその主任候補に指名され、明治29年に研究のため急遽ドイツに派遣されることになる。したがって、明治31年に講座は開設されたものの主任教授や講義担当者はまだおらず、当然のことながら関連科目の開講はまだなかった。結局久保は帝大医科大学に入学してもしばらくは耳鼻咽喉科関連の授業は受けていなかったことになる。

1899（明治32）年12月に岡田和一郎助教授が留学を終え帰朝し、年明けの1月から教室が開設され、大学での耳鼻咽喉科外来も始まる。この年猪之吉は医科大4年次に在籍し、結局卒業までに正式に岡田から指導を受けたのは春学期だけということになる。岡田助教授が外来診察を始めると、多くの患者が訪れたが、まだ病室もなく医師もいない状態で、混乱が続いた。しばらくして小此木信六郎氏の紹介で医局員として菊池循一が加わったものの、手術も外科の病室を借りたり私立病院に患者を入院させたりしての綱渡り的な「操業」でなんとか切り抜けていた²¹⁾。岡田助教授は方々に精力的に働きかけ、待遇や病室、スタッフの確保に奔走した。そして、この年の暮れに、久保猪之吉も叔父小此木信六郎の紹介で教室に参加するようになる²²⁾。猪之吉は順調にいけば明治33年の7月に32年度卒業者となるはずであったが、実際には半年遅れの明治33年12月に医科大学を卒業した²³⁾。

1900（明治33）年、欧米に旅立つ常観を見送った猪之吉は、卒業試験勉強で忙しい毎日を送った。岡田が医局を始め、猪之吉もその一員となるが、岡田が帰国するまでは比較的時間的に余

裕もあり、歌人としての活動に積極的に関わった。ある意味でこの時期が歌人として最も脂ののった時期であった。詳しくは次節で述べる。

先にも少し触れたが、常観との交友関係を通して、猪之吉も常観が参加していた仏教青年運動にも関心を寄せ、大日本仏教青年会の会員にも名を連ねた。しかし、集会等にも時々参加していたが、特に会の運営や催しの企画などに積極的に関わった形跡はない。ただ、当時常観が宗教活動を通して交流のあった友人、同志や教団関係者とは懇意になって、付き合いをしていたようである。久保と宗教との関わりでは、和歌や歌壇関連の記事など数点を宗教組織の機関紙に投稿していたことが挙げられる。例えば、真宗本願寺派が設立した普通教校の有志によって設立された反省会有志会の機関誌『反省会雑誌』や近角もその総務員として活動の指揮をとっていた大日本仏教徒同盟会の機関紙『政教時報』などが投稿対象となった機関紙である²⁴⁾。投稿された記事については関係箇所では触れるが、杉野大沢の「医人文人あれこれ 長塚節と久保猪之吉」でも一部引用されている小雑誌『星月夜』について、少し説明しておく。

「今年も四月八日となりぬ。君の依頼をうけて日蓮上人を草せしは二年の昔となれり。」これは久保が常観に宛てた1901（明治34）年の春の書簡にある一文である²⁵⁾。久保は常観からの依頼でこの年の釈尊降誕会で配布された小雑誌『星月夜』に「日蓮聖人伝」を執筆した。その『星月夜』の広告が『政教時報』に掲載されていて、

常盤大定先生／久保猪之吉先生／服部躬治先生新作合編 横山大観先生画による本書は有名なる常盤文学士及方今歌学界を震撼せるいかづち会の錚々たる久保服部の両君が満腔の熱心と十二分の同情とを以て鎌倉時代の法然道元親鸞日蓮の四大徳を歌へる神韻なり此等四聖の流を汲み徳を慕ふ人士及文学に志す諸君は必ず一本を購読あれ

とある。若い著者たちではあるが、熱のこもった思い入れの強い小誌となっている²⁶⁾。常盤文学士、つまり常盤大定は仙台出身で、常観と同じ浄土真宗大谷派の寺院の息子でもあった。東京帝国大学文科大学哲学科で常観と同級で、同時に大学院にも進学している。その関係で久保とも旧知の仲であった。シナ仏教の研究者で東京帝大教授を歴任し、退職後は浅草本願寺の輪番を務めた。『星月夜』では、号として用いた常盤榴丘の筆名で「法然聖人」と「親鸞聖人」を書いている。ちなみに次の節で触れるあさ香社の結成に参加し、後久保らといかづち会を結成する服部躬治は「道元禪師」を執筆した。

久保は「日蓮聖人」を執筆しながら、度重なる法難にもくじけず布教に打ち込んだ日蓮聖人の生涯に引き込まれ、その強い意志と行動力、またその博学ぶりに圧倒されるばかりであった。『星月夜』の「日蓮聖人」は9編からなり、それぞれ「誕生水」「南部北嶺」「清澄山の旭」「松葉ヶ谷草庵（立正安国論上）」「伊豆の濱風」「故郷の秋（立正安国論下）」「佐渡の荒波」「身延

盟友、近角常観と久保猪之吉一求道会館に残された書簡をめぐって（三宅）

山の月」「池上の落日」と上人の生涯を、全 246 句の韻文で詠い上げている。特にその「道念」の元となった一編は、第七編の「佐渡の荒波」34 句で²⁷⁾、これは佐渡における日蓮が不屈の精神で苦難を乗り越った模様を、特に塚原の法難あたりについて描写した句である。

朝には一部の妙法手に握り 草堂をいで、日を仰ぎ 法華止観を目に曝す。
夕には五塵出離の雪をかみ 氷るが如き月を見て 題目七字を先ずとなふ。
蟻の如集り来る法敵は 信濃越路の境より 塚原の里に幅鞆す。
権実の鋒を交へて襲ひ来る 敵の質疑もとけゆきて 利剣に爪をきる如し。

常観は日蓮ほど過激ではなかったが、久保は常に常観に日蓮の熱き血潮を見ていた。常観の宗教法案に対する反対運動に打ち込むひたむきな姿を日蓮に写して、「寂然不動の精神に至りては何人も賛嘆の辞を禁ずること能はざるべし。憶ふ昔日蓮上人が仏陀の使徒なりと声言せしその力を」と書いてもいる²⁸⁾。久保の佐渡記については次節で触れる。

5 久保猪之吉の歌人としての活動

歌人としての久保猪之吉といった場合、和歌革新運動を進め、現代和歌の源流の一つとなった「いかづち会」の創設者として記憶されていると言ってもよい。しかし、歌人としての歌詠みにしろ、新派の結社として立ち上げたいかづち会にしても、ほとんどの場合猪之吉単独で語られることは少なく、この会自体比較的短期間で本格的な活動も行なわれなくなったこともあり、落合直文やあさ香社との関連で名前が挙がることが多い。

久保が主従した落合直文は猪之吉が第一高等中学に入った時、国文学や古典を教えていた教師で、久保も歌の趣味もあり、次第に彼に傾倒していくことになる。落合直文は明治 26 年に浅嘉町（現本駒込）に引っ越し、ここで短歌改良を目的とした和歌の団体「あさ香社」を結成した。落合は当時国語改良運動と称して、効率的な国語づくりの必要性を訴え、これに連動して、言文一致化、文字の表音表記化、文体の画一化などを進める一方で、同時に「あさ香社」の短歌改良運動に関わり、注目を浴びた。いかづち会の結成目的にもこの国語改良がうたわれていた。あさ香社には与謝野鉄幹ら新進気鋭の青年たちがいち早く参加し、久保も服部躬治や尾上紫舟などととも結成直後に会に加わった。しかし、後に久保らは新たに和歌革新を目指し、服部躬治、尾上紫舟、菊池駒治、斎藤雄助らといかづち会を結成しあさ香社を去り、他にもいくつか同じような新会が発足したこともあって²⁹⁾、まもなくあさ香社は事実上分裂し、歌壇は群雄割拠の程を表す。

猪之吉らが和歌の革新運動の母体ともなる「いかづち会」の設立時の模様について久保自身

が「いかづち会時代の思出」として後に次のように書いている³⁰⁾。

いかづち会は明治31年6月30日自分の下宿であつた東京本郷区駒込の俗に桜観音と呼ばれた正念寺で開会式を挙げた。自分は未だ医科の2年生であつた。此日集まつたのは5名である。すなわち、服部躬治（跡見女学校教師）、……さて正念寺に集合した連中が和歌の革新を唱へるのにふさわしい会名はなからうかと首を鳩めた。折から大雷雨があつた。自分の発案でいかづち会という名称が提議せられそれに極まつた。

そもそも、いかづち会の発足は、伝統的な旧派歌壇に対する批判から始まつたものであつたが、猪之吉はこのいかづち会結成の前に、真宗本願寺派が設立した普通教校の「反省会有志会」による機関誌『反省会雑誌』に「歌人の品性の下落」という小文を発表している³¹⁾。『反省会雑誌』は宗教関連の雑誌であるが、後に『中央公論』となつたことからわかるように、文学関連の評論なども掲載する総合雑誌的な性格があり、猪之吉の歌壇についての論説も全く違和感のないものであつた。この小文は猪之吉の正義感、道德観がよく出た論説で、同時に旧派歌壇に対する批判の一端も読み取れる。

このいかづち会は発会時は会員6名という少人数の結社で、しかも一名を除く全員が帝大生という、かなり「内輪の集まり」であつた³²⁾。特に指導の主催者を立てることもなく、また、学生がほとんどであることから、将来的に見れば卒業後の会の存続も流動的な状況で、また、多くの他の結社のように会の機関誌もなかつたことなど、発会当初からある意味で自由な雰囲気を持った結社であつた。しかし、改革にもえる若者集団であつたことが逆に固い結束性を持つことにつながり、新聞を始め、関連和歌結社の機関紙などに斬新な作品を次々に発表し、当初は新鮮で、勢いもあつた。「いかづち第一声」では「世間の有名な旧派と目された人々の歌を忌憚なく批評」し、反響の渦を巻き起こした³³⁾。これを象徴する出来事として、明治33年の新年に「国風家懇親会」と称する新年会で、藤原久良伎、武島又次郎、末松謙澄、落合直文等、そうそうたる文人、国文学者等が集い、歌壇のゆく年くる年を祝つた席での久保の演説がある。この席上、久保は文壇の重鎮を前に、歌壇の批判と改革の必要性を訴えたのである。

このいかづち会の結成は、若者の一時の勢いからだけのものではなかつた。この会の結成について久保の言葉をかいつまんで紹介すると、演説は次のような趣旨であつた。「落合先生の基に在って同士が時々集まって歌を作つたりしたが、その時今の歌については改革をしなければならぬ、打破らないといけぬという考えが皆に蟠つていた。併し、それが発して一の会となり、或いは世の中にその意見を発表するまでには余程長いことで一朝一夕のことではなかつた。それで昨年(明治32年)の6月30日に集まつたとき、この歌について色々弊害が起り、色々改正すべき点もあつて黙つていられないから、傍若無人の振る舞いかもしれないが自分たちが率

盟友、近角常観と久保猪之吉—求道会館に残された書簡をめぐって（三宅）

先しようではないかといって、いかづち会を起こした」と、熟考の末のやむなくの行動であったことを明かしている³⁴。

さらに久保は続けて、歌壇の現状について「自分は医学をやっていて国風（うた）専門の歌人ではないけれども、専門家でない自分たちがやらなければならないのは国風専門の人たちにも罪がある。現在は思想が非常に沈んでいる、悪く言えば腐っている、とにかく活気がない。今の国歌については改革をしなければならない、打ち破らなければならない」と声を大にして訴えた。

そして、改革の方向についても、具体的に弊害や改良すべき点をあげ、歌の内容と形式の両面から、かなり突っ込んだ提言を行っている。たとえば、内容に関する弊害や改良点については、まず思想沈滞をあげて、次のような変革の必要性を強調している。

「日本の古を尊ぶと言う習慣が先天的に這入って、新しいものという嫌がるという考えがあるが、歌は芸術であるので、時代とともに、人の思想の変遷とともに変わるべきものである。従来窮屈な規定がありすぎて変わることができないでいる。万葉の時代など以前の時代においては余程自由な考えであった。例えば、近年は自然を読むにしても、題詠が習慣になり、見たこともなく、聞いたこともないものを闇雲に詠む習慣が付き、地理の風物を詠んだものに見るべきものがなくなった。万葉の時代は違った。それが近年は実地に接しない、自分の体験に欠ける歌ばかりである。実地を自分で踏んでみるという習慣をつけないければ本当の風物も詠めない。真の進歩のためには余程の方法を変えて、実地を自分が履んで見るという習慣を作るのが必要である。題目について作ると言うようなことばかりに力を用いて、元来思想を養うと言う根本にかけている。そしてただ作るという癖がたくさんあり、とにかく内容において改良を要する。」

久保は、この実地を踏んで、体験に基づいた歌作りの例として、自分の帝大入学前後から行った旅行体験を挙げている。山については、四国漫遊の旅で四国で一番高い石槌山に登って四国を眺めた時。佐渡に行った際金北山の第一峰に登った時。また海については房州の海岸を歩いた時など、その時々々に詠んだ歌を添えながら、実際の情景、感動を詠む大切さを訴えた³⁵。

このような経緯で結成されたいかづち会であったが、やはり「国歌専門の歌人」ではなかったわけで、久保も次第に医師としての勉強や診察などに追われるようになり、歌壇での活動からも遠ざからざるを得なくなり、会も自然消滅していった。

先に触れた、常観と猪之吉の下宿先だった正念寺は、いかづち会の結成場所という他に、落合と猪之吉の出会いを説明する際に必ずと言っていいほど引き合いに出される場所でもある。それは、猪之吉は第一高等中学（のち一高）に進学すると、そこで国文学などを講じ短歌会の指導にも当たっていた落合と知り合い、住まいも同じ本郷駒込であったこともあり、落合のもとに通い知遇を得、薫陶を得たが、一方、落合も猪之吉の生活が困窮している様子を知り、猪

之吉の寄宿先であった正念寺を訪ね、住職に礼を述べた上、学費の補助を申し出た、という話である。久保の「若しも先生の補助がなかつたら今日あることを知らなかつたといつてよい」という感謝の言葉の背景である。

些事ではあるが、この話に関しては少し気になることがある。それは落合が猪之吉の困窮ぶりを見かねて正念寺を訪ね、学費の援助を申し出たのはいつ頃の出来事であろうか、というものである。ほとんどは久保の一高時代のこととして語られている。この時の落合の訪問については『廿五年忌に』に次のように書かれている³⁶⁾。

ある雨のひどく降る日に先生は突然桜観音を訪ねて来られた。住持に逢はれて、親しく自分の為^にに礼を述べられ、そして自分に、毎月学費の補助をするからしつかり勉強し給へといはれた。

この文の後に「自分は一の苦学生であつた。高等中学時代に満足な靴をはいたことがなかつた」と続く。したがって、苦学生であつたのは高等中学時代で、落合からの援助もこの時のものであると受け止められているのではと思われる。しかしこの文に続いてさらに「大学の在学中も制服を作つたことがなかつた」と続き、高等中学時代も大学時代もかわらず「苦学生」であつた(もっとも、生まれてからずっとであつたが)とも読めるのである。いくつかのことから「先生は突然桜観音を訪ねて来られた」のは一高時代ではなく、これはおそらく帝大に入ってからのことではないかと思われる。つまり、猪之吉の帝大入学は明治29年である。常観も一高卒業まで寮に住んでいたと考えられ、その後正念寺に移ったとすれば、猪之吉も当時の多くの学生と同じように寮を出て、正念寺に移ったのは帝大に入ってからのことであつたと考えても不自然ではないからである。

一高時代の経済上の援助については、落合の辞書作りの手伝いをした御礼を学費の補助に当てられたと語られるが、猪之吉が本格的に落合の辞書編纂などを手伝つたのは「医科時代」であつた。『廿五年忌に』に「自分は文典がすきで歌がすきで非常に先生を慕つて居つた。之が先生に近づき、又知られた動機であつた。先生が後に「日本大文典」を著され、又「言の泉」を編せられた際も、自分は医科に居つたが、先生にお手伝ひする機会を与へられた」とある(下線は筆者による)。落合直文の『言泉：日本大辞典』の冒頭に「緒言」があり、そこで謝辞が述べられている³⁷⁾。そこでは、「久保猪之吉君は、その専門の学科に関する語を、全く、担当せられ、大に助力せられたり。……この書の為には、恩ある人(人)なり」と、久保の貢献への謝辞がある。この辞典が発行されたのは明治31年のことであつた。事実上「編纂は、廿九年の秋、大かた、終へたり」とも緒言にあるが³⁸⁾、これは猪之吉の大学時代のことである。このようなことから一高時代も落合から多大な薫陶を受けていたが、落合と猪之吉との本格的

盟友、近角常観と久保猪之吉—求道会館に残された書簡をめぐって（三宅）

な付き合いは帝大入学前後からであると推測できる。つまり、桜観音を訪ねて住持に逢い、親しく久保の為に礼を述べ、そして猪之吉に毎月学費の補助を約束したのは帝大時代であろう。当時の帝大の授業料も安くはなかったこともある³⁹⁾。

余談になるが、上で、「大学の在学中も制服を作つたことがなかつた」との文言を引いたが、この後に「卒業式の時は制服がいるといふので、文科の近角常観君の制服のLの付いたのを借着して漸くすましたのだ」と明かされている。これも久保の貧困時代を語る逸話としては有名である。実は九州帝国大学耳鼻咽喉科教室の創立20周年の祝賀会に合わせて、久保のそれまでの業績を称え、門下生や弟子たちによって「久保記念館」が贈呈された。その久保記念館に久保が還暦を迎え、退職した際、門下生有志が発刊した「久保教授写真帖」が展示されている。非常に多くの珍しい写真が時代順に載せられていて、猪之吉やより江を知る上で貴重な写真集である。ここにある写真の選択、整理、説明などはより江夫人に託され、猪之吉自身も協力して完成したものである⁴⁰⁾。そこに久保が近角から借りたという制服姿での卒業式の写真もある。ところが制服姿の写真の襟にはLの文字は見当たらない。「久保教授写真帖」にある写真の説明を見ると、「明治33年12月 東京帝国大学医科大学卒業記念写真の中より。この制服は親友近角常観氏のもの。襟章Lをとりて借用」(下線は筆者)とあり、納得した。ただし、この時期には近角常観はすでにベルリンに滞在していたので、制服は多分久保の世話になっていた弟の常音を通じて借りたのではないかと考えられる。

この帝大時代の猪之吉と落合直文との良き関係を示す逸話が落合の「こよひの友」に見ることができる⁴¹⁾。これも、猪之吉が帝大時代観音寺に寄宿していた時の出来事である。印象に残る話でもあるので、紹介しておく。落合は萩を愛し「萩之家」を雅としていたくらいで、また毎年友人を招いて「月前萩」という歌会を開催していた。ところが開催するはずであった日はたまたま暴風で萩も散り、会も中止となった。しかし、その夜の「月のさやけさ」は例年になく素晴らしく、この月だけで会を催せばよかったと後悔しながら落合が一人寂しく庭にいると、「夜ふけて、たづねきたるものあり。誰かと見れば、学弟久保猪之吉君なり。」椽に腰掛けて、「あはれ、こよひは、友なしと思ひしに、はからずも、うれしき人に訪はれて、歌などよめり。…30年9月の11日の夜」と過ごすことになった。落合と腰掛けながら猪之吉は、月に故郷を偲び、歌数句を詠んでいる。

ふるさとに月見ています父母の／思ひおこすはこの身なるらむ
今宵しも悲しきわれを思ひいでて／月にいくたびは、か泣くらむ
かぞふればこよひの月に故郷を／思ひいでつゝ、八とせへにけり
おのづからかけにかけゆく月影を／満てるものとも思ひけるかな

久保は、この夜「正念寺にかへつたのは夜明けの頃であつた」と書いている⁴²⁾。明治30年9月のことで、猪之吉が帝大の2回生になったばかりの頃の出来事であった。

このように、久保は落合直文について『廿五年忌に』（「落合直文先生と自分」も同文）にくつつか思い出をつづっているが、実はあまり知られていないが、猪之吉はこの4年後にも「歲月流水の嘆は今更ながらのことであるが、先生が亡くなられて30年も経過したとは全く夢のようである」との書き出しでもう一篇「落合直文先生の思出」と題した小文を『九州大学新聞』に書いている⁴³⁾。冒頭には、『廿五年忌に』と同じように、落合の訃報について書かれている。ただ、ここでは『廿五年忌に』には見られないより江の歌が紹介されている。留学地のフライブルグにもやっと慣れた頃、多少懐郷の念に駆られながら落合の病気を案じていた年明けに、妻のより江から落合の訃報が届き、「何を三年たが為寒きひとの国み脈とるべき君はまさなくに」という歌が添えられていたというものである。この歌はもちろん『廿五年忌に』の冒頭にもある、横浜埠頭までの汽車の中で落合と猪之吉が交換した歌に呼応しての歌である⁴⁴⁾。この他にも、落合の風貌から気質、一高時代の思い出などを引きながら、思い出をつづり、「今日迄生きて居られたら、自分の身の上についてどんなに喜んでくださつたのだろうとさびしい感じがする」と30年たっても変わらぬ尊敬と思慕の念を込めて、追慕している。

いかづち会結成後に久保は会の名称となった「いかづち（雷）」について考察した「いかづち物語」を書いている⁴⁵⁾。古事記の神代の巻に見える雷鳴の逸話から、梵語をはじめ諸外国語の雷（神也）の語源を調べたり、さらには、世界の古典、物理、神話、経典など、縦横無尽にいかづちにまつわる物語を紡いでいる。これから見ても久保にとっては、この「いかづち」の命名はかなりの思い入れがあったことがわかる⁴⁶⁾。そのためか久保はこの会以外にも「いかづち」という名付けを行なっている。これについては、次のようなエピソードもある。

猪之吉も帝大の最終学年になると卒業試験や試問の準備に追われた。当時の常観への書簡にも「多忙の御身をもて度々の御消息謝するに辞無し。当方の御無音を恥つる外無し」、「時正に試験中細書を呈せむとおもひし為中々に遅引となり失礼せり、月余に渉りし試験もすみ一周程房州ニ疲労を養ひ来りし比也」とご無沙汰を詫びながらも試験の合間に息抜きの旅をしたことを書きつけている⁴⁷⁾。ちょうど夏休みということもあり猪之吉は房州高崎に友人を訪ね、つかの間の休日を楽しんだのだ。

この出来事については、久保は別に読売新聞の「葉がき集」という欄に「房州より第二信」と題した紀行文を投書し、その中で触れている。文中には「絶景たる高崎の浜に新旅館落成せり。いかづち館といふ、小生の命名にして歌あり。家の名をいかづちとせよ遠つ人も音に聞きつゝ尋ね来るがに」⁴⁸⁾とある。ところが、この新聞への投書には続きがある。実は、時も時だったこともあり、この記事がある読者の怒りに触れた。同じ日の読売新聞の同じ「葉がき集」欄に「忠告生」という筆名で久保の報告に対する批判の投書が掲載されたのである⁴⁹⁾。忠告生

盟友、近角常観と久保猪之吉一求道会館に残された書簡をめぐって（三宅）

は「君が眼中一点の涙なきか、百度以上の炎暑に立ちて戦闘する我軍人の苦を思はざるか、北京城中九死に瀕する我同胞の厄を思はざるか、況や此重囲の中には君が同郷の某先輩あるを知らざるか、房州の勝を説て都人の来遊を促す今やさる閑日月の時に非ず」と痛烈に久保の無神経さをついたのである。

二日後、同じ「葉がき集」の欄に久保からの返信が載った。曰く、「予は北清に戦乱ある事を能く知れり、天津の苦戦をも能く知れり、……はた又中に同郷の先輩なる服部文学士の居玉ふべき事をも⁵⁰⁾、されば日として念頭を離るゝこと無く、……されど拳国兵となりて討死にすべき不幸に達せずば人々その本職を忘るべからず……忠告生君よ、房の海辺波清き所、物価廉にして旅装易し、或は読書、或は保養、徐に奉公の大分を尽し玉晴れ、此真に国を憂ふるものゝ分也と信ず」と大陸での緊張状態に一喜一憂する国民に対しても、平常心でそれぞれの職務をまっとうすることの大切さを説いている。この北清事変を巡る大陸での軍事情勢については、別に常観への書簡の中でも触れられている。そこで「北清の乱^レ戦は御地ニてもとかくの批評や観察や希望や要求や多かるべし。一国の内乱ニ対て全世界の兵を動かすといふも随分稀有なる歴史上の談なるべし」と始まり、上の「葉がき集」と同様の主張も盛られ、ドイツなど諸外国での意見を知らせて欲しいと常観に書き送っている。

先のいかづち会のところでも触れたが、久保は1899（明治32）年の夏休みに越後から佐渡島への旅をしている。この旅も「いかづち」にまつわる旅でもあった。この夏も、ちょうど恩師となる岡田和一郎が留学から帰国する直前で、猪之吉自身卒業試験までまだ少し時間があり、自由な時間が持てるいわば最後のチャンスといってもいい時期であった。

佐渡へは多くの文人や歌人も訪れ、旅行記や小説なども少なくない。久保との関係が深い長塚節にも『佐渡が島』の紀行文がある⁵¹⁾。久保が佐渡方面の旅を思い立ったのは7月21日のことであった。すぐに旅立ち、23日には最初の逗留地高田から旅の第一報を読売新聞に投稿し、『雲と水と』として掲載された⁵²⁾。さらに9月になると同じ読売新聞「月曜付録」に「佐渡の浜風」を4回にわたって連載した。翌10月から翌年6月にかけては『政教時報』に「雲水雑記」を連載している⁵³⁾。

この久保による佐渡への旅については、拙稿「久保猪之吉の佐渡紀行」でも簡単ではあるが書いたので⁵⁴⁾、以下では少し補足的に歌人久保に与えた影響などについて触れることにする。「いかづち会時代の思出」に「此頃熱心な帰依者の一人が佐渡の相川にあった。柄沢寛といふ弁護士で名をいかづちとしたいから承知してくれ、その内当地方にぜひ遊説に出られるやうにと再々書面があった。その手紙に誘はれてつひに一蓑一笠といふやうな旅装で、明治32年の夏長野新潟地方をふり出しに佐渡柄沢いかづち氏の宅に落ち着いた」とあり、一般には「遊説」の旅であったと思われるが⁵⁵⁾、実はこの旅にはもう一つ重要な動機があった。それは、日蓮の足跡をめぐり、この島での彼の成長ぶりを確認することであった。

『政教時報』に連載した「雲水雑記」には佐渡旅行の目的を、日蓮の「燃ゆるがごとき道念の刺激」からであったと書いている⁵⁶⁾。猪之吉は、上人が流罪で佐渡に配所され、過酷な自然環境に耐えながら「此島に入りてより四年、如何に沈痛に、如何に着実に、如何に気高く、如何に宗教家らしくなりしぞ」とその変身に驚嘆し⁵⁷⁾、この島で主著である『開目抄』や『観心本尊抄』を著し、また入島後は、名文章家の素質を開花させた点に着目し、幾多の困難にくじけなかった日蓮、また配所でありながら多彩な文化を育んだこの島に潜む力に魅せられたのであった。

この島でも、猪之吉の人々との出会いは多岐にわたり、歌人や宗教家はもちろん、郷土の教員や史家などと交流を深め、しばしば夜を徹して話しこんでもいる。新しい発見も多かったが、もっとも印象的だったのは「島の内少也。島の交通不便也。されど新事物に対つて吸収力強く、好奇心多し。遠客の歓待起り偉人の感化は弘り易し」と島は平和で人は純朴であったことである。その印象を、「来よと言うたとて往かれよか佐渡へ、佐渡は四十九里浪の上」と歌われた佐渡であったが、「母君が鬼もや棲むと問はせつる／大佐渡子佐渡浪しづか也」と詠むほど、すべてが穏やかであったと書いている。様々な法難にであった日蓮であったが、「かの聖人等此島に入り来りしもの案外の楽地を見出でけむ」との感想を記している。

この日蓮の「道念」にかき立てられ、荒波を渡って佐渡に旅した猪之吉であったが、歌人としては、佐渡の「いかづち」との交流の他に、この地で日蓮の文章力が養われたと主張する点には注目しても良い。それについて、猪之吉は日蓮が千日尼から文章について影響を受けたに違いないと力説する。日蓮が「佐渡以来、身延に入りし以来の御文章御消息と称ふるものが如何に流暢にして如何に活動するかは人よく知らむ。しかもその文体は漢文直積体にあらず、擬古体にあらず自ら一家の風あり」などとある。つまり、『立正安国論』をはじめ上人の入島以前の書き物は多くは漢文で、借り物的であったが、入島以後の消息などはすべて国文体で、「流麗にして意の達するところ羨むにたへた」名文であると賞賛する⁵⁸⁾。

そもそもいかづち会の結成にあたって、従来之歌について改良すべき点として「吾々は一小部分たる国歌に付て彼此いふよりも混沌として未だ定まらぬ国語の改良、国語の統一に付て大に考を持つて居る」と、落合一門らしい発言をし、改革運動にも力を入れていたことがある⁵⁹⁾。そして日蓮の書き物について「吾国在来の国文家が是等の名文活文を度外にしたりしは何等の間抜けぞ（中略）かへすかへすも悔し」と手厳しく批判している。

日蓮に文章の面で影響を与えたとする千日尼がどのような人物であったのかは、ほとんどわかってはいない。日蓮との関係でもっぱら話題になるのは夫の阿仏房の方である。日蓮配流の時は阿仏房は浄土宗の熱心な信者で日蓮を法敵として迎えたが、しばらくすると熱心な日蓮の帰依者となった。日蓮の監視役であった阿仏房は妻千日尼と共に、流罪の身で過酷な生活を強いられていた日蓮に対し、彼女が食事を運ぶなどの身の回りの世話をし、一心に奉仕した。こ

盟友、近角常観と久保猪之吉一求道会館に残された書簡をめぐって（三宅）

のような中で久保は京からお供した千日尼に注目し、歌道にも上達していたとして、日蓮への影響を確信している。ただ、阿仏房夫婦の出自に関しては定説がなく、阿仏房は京で順徳天皇に使えていた北面の武士で、承久の乱で佐渡に流された上皇に従って佐渡に来たという説が有力ではあるが、阿仏房は佐渡新保村の農民であったという説もある⁶⁰。

猪之吉は佐渡の旅を終えるにあたって、次のような感想を記している。「予が眼中には蛇はあらざりき、予が心中には毒は来らざりき。かの日蓮上人が心をおきて十方法界物無しといひけむむげにとおもはれたり。旅行日記の終末に国歌一首を抜す。鬼をしておのが心にすませずば／世の人皆は佛ならまし。」

ところで、久保が佐渡への旅を行なったちょうど同じ明治32年の夏に、尾崎紅葉が病氣（神経衰弱）治療のため朝倉温泉へ向かい、ついでに佐渡へ足を伸ばし、いく先々で紀行文を書いている。そして、ちょうど久保が朝日新聞に連載を始める直前から、ほぼ2ヶ月に渡って『読売新聞』に旅行記を載せた。紅葉山人「煙霞療養」がその連載である。久保も尾崎紅葉の連載記事を読みながらの旅で、「煙霞療養毎日拝見いたし居り、御奮発おどろきいりぬ」と旅の途中で「佐渡の浜風」やその他の記事の中にコメントや異説、補足などを書き送っている⁶¹。

紅葉は、赤倉から新潟、そして佐渡に渡り、人、風土、習慣、食、方言、などについて、詳しい紀行文を投稿した。佐渡の松原を訪れた時の記事が載った時は、直後に久保が新聞にコメントを発表している。紅葉は松原について「風情はおどろおどろしき荒礎の配所として予想に画いた佐渡の景色なる者とは全く相反して、明媚愛すべく、楽しむべく」処であると感じ入り、順徳天皇の御製の「啼けば聴き聴けば都の恋しきに／此里過ぎよ山ほとゝぎす」もこの風景を愛づるあまりに出たのではと書いたことから、久保もこの歌については思うところがあり、「今朝昇校の際フト読売を手にして湧きいでたる考也。もだしがたくて課業の時間を二三時潰したり」と、数日後『読売』にこの歌についての小文を投稿した。「啼けばさくく古歌に就て」というのがそれである⁶²。

久保も佐渡に旅し、順徳天皇の御跡を訪ねた際、この時鳥の歌を耳にし、連れともこの歌について議論を交わしている。一方、その数年前讃岐を旅した時も、そこに配流された崇徳天皇の御製としてこのうたがやはり現地で伝えられているのを耳にしている⁶³。一体、どちらが先で、また、どのような経緯でこの歌が他方の島に輸入されたのか。久保はこの歌そのものを吟味し、いくつかの点で御製とは考えにくいと結論を下す⁶⁴。多分、訛伝されたものか誤写されたか、または、「後人の偽作」である可能性もあるという。何れにせよ、どちらの御所にもそれぞれの言い分があり、その先後を争うのも愚でしかないであろうと言う。結局、結論的には、研究は研究として、美談は美談として研究のため抹殺されるべきではなく、「伝説喜ぶべし」と結んでいる。直感や緻密な分析に基づきながらも、人々の郷土への思いや誇りに心を配り、配流にあった天皇の御陵の旅を思い出しながら、医学の勉強の合間に密かに推理を楽し

む姿が目浮かぶ一説である。

実は久保はこの佐渡漫遊を機に紅葉山人と懇意になり、帰京後山人の家を訪れたりもしている⁶⁵⁾。佐渡の帰りにも二人は新潟で出会っている。久保はこの佐渡への旅を思い返し、次のように記している。

明治32年夏休み中のことである。自分は新派の歌の会いかづち会といふのを同志とはじめ、地方に遊説に上つた時で、二十幾歳の血気盛の大学生であつた。まづ長野から新潟に赴き佐渡に渡つた。相川の本間家に仮寓して、或は演説、或は歌会をやつた。今から考へると随分無鉄砲のこゝろをしたものだと思ふ。此時山人は佐渡の南端小木港にあつた。やがて新潟に引き返された。自分が新潟に戻つた時には、山人のまさに帰京の途につかれむとする時で、自分は山人に一寸逢つた。

久保は留学に出発する前の慌ただしい時間をさいて、見舞い方々暇乞にこの紅葉山人を訪ねている。ちょうど山人が散歩にでかけた後で、その日は会うことはできなかったが、翌日山人からの「愛情と教訓との充ちて居る手紙」を受け取った。猪之吉は出発前で再び訪ねることができず、「此手紙を記念としてカバンに収め新橋を発つた。そして遂に山人に再び逢ふ機会はなかつた」。手紙には、「佐渡には一足先に旅行いたし候某なれども此旅は学兄の為に壯遊を先んぜられ候事かへすべしも残念千万に御座候」など、久保への思いが書きつけられていた。手紙の最後には、「げに命をしく候御帰朝後の久保君が見たく万感鐘りて難禁候」とあった。この数ヶ月後尾崎紅葉は帰らぬ人となった⁶⁶⁾。

猪之吉は佐渡から帰ると、旅で出会った佐渡のいかづちをはじめ多くの人から書簡が届き、手紙での交流が続いた。これらの手紙のうちから数通を新聞などで公表している。『読売新聞』の「佐渡の浜風」もその一つである。また、冬には佐渡の厳しい自然と戦う人々を思い「佐渡が島をおもふ」と題した小文を書いている⁶⁷⁾。そこには「佐渡が島の山よ、川よ、海よ、人よ、無事にして歳はおくれよ、歳は迎へよ。遠くとも今一度はゆきて見む 忘れがたき佐渡が島山」とある。

6 ベルリンへの報告書簡：常音の入学試験

1900（明治33）年、近角常観は東本願寺から西洋宗教事情視察の命を受け、4月13日、大勢の見送りの中、横浜埠頭を後にする。当日の久保の日記には、見送りの模様を歌人らしく歌を添えて、次のように綴っている⁶⁸⁾。

盟友、近角常観と久保猪之吉一求道会館に残された書簡をめぐって（三宅）

にくゝもふる雨かな。風さへさむし。横浜の埠頭浪漫々「エムプレス、オプ、チャイナ」号は煙を吐いて我を待つに似たり。…拾数名の親友、甲板の上に兄を擁す。壮図勃々たる兄もけふは流石に打ちしをれて。兄の令弟も船中に在り別の歌よまる⁶⁹⁾。

兄君のみあとしたひてわれも亦何時か渡らむ太平の^{なだ}洋
いざさらば別を告げむ諸共に頼む命よまさきくてあれ

おのれも名刺の裏にしるして、兄に

たゝなはる大波小波やすらかに超えて着きぬの御文を待たむ

そして常観の故郷にちなんで、「琵琶の海竹生の島の弁財天 君が航路を守らせ玉へ」と送り出した⁷⁰⁾。

常観は欧米宗教事情視察の旅に出るにあたって郷里に残した父母らの心配の他に、高等学校の入学試験を控えた異母弟常音のことが一番の気がかりであった。出発の間に久保の小石川の住まいを訪れ、常音の世話と監督を頼んだ。猪之吉はこの時の模様を「『ベルリン』の友を憶ふ」で、次のように記している⁷¹⁾。

夜にいたりて兄来給ふ。いふやうは出発後の事凡てとゝのひぬ。唯一つ心にかゝるは弟の事なり。心をゆるして依頼すべき人無し。唯だ君をこそといふ。おのれ卒業試験の期も近し。国より弟来りをればとて辞す。兄きかず。弟を君の弟ともおもひわれともおもひ傍におかせ玉へ、それだに定まらば明後日は発せむと。おのれ感涙に打たれてそのまま諾しぬ。

常観と猪之吉がいかに互いを頼り、家族のように思っていたのかが伺える一節で、これで久保の常音に対する献身的な指導や、逐次常観の元に報告の書簡を届けていたことが納得できる。

常音は1883（明治16）年、常観と同じ湖北の琵琶湖のほとりにある延勝寺の東本願寺派の西源寺に生まれた。父常随の後添えとして、近くの真宗寺院から嫁いできた雪枝との子で、常観とは13才下になる。常音は兄を頼って上京し、本郷に開校したばかりの京華中学に入り、第一高等学校を目指すのが叶わず、語学学校などで受験勉強をした後、金沢の旧制第四高等学校に合格し、入学した。在学中に大煩悶を経験した末、兄を頼って東京へ戻り、東京帝国大学文学部の選科に入学した⁷²⁾。その後については、常音の娘たちによれば「兄の説く真の信仰が分からず、正岡子規の門を叩いたり、伊藤左千夫、長塚節達と交遊したりの日々が続いた」が⁷³⁾、「ある機縁で兄の説く真宗の真髓を体得することができ…それからはひたすら、明治の傑僧と言われた兄近角常観のよき手足となり、兄弟が一枚岩になって、宗教活動を行なってきたことになる⁷⁴⁾。久保が常音の進学に当たって世話をした時は、ちょうど第一高等学校を

目指して受験勉強に励んでいた時期である。久保からの書簡は、そもそも常音の試験準備や試験結果に関する報告のため出されたものであるが、折々の日本の情勢や近況、加えて身の上相談等も書かれていた。

久保から常観宛の最初の書簡となった1900（明治33）年7月の手紙には⁷⁵、「御令弟も学年試験を難無く通過せられたり」と報告があり、翌年4月には「令弟常音の君も無事卒業せられたり。明日より補習科に、入らせ玉ふ筈、今よりは唯高等学校入学の準備のみとなれり。入学は学校教育最後の関門故充分御尽力申して入らせらるゝやう仕らむ。七月迄の日を時間刻にして一定の進を毎日とるやういたしおけり。御安心下されたし」と、常観を喜ばせる便りが送られている⁷⁶。

さらに、2ヶ月後、試験が迫ると「何はさておき令弟の試験も一ヶ月の間を余すのみとなれり……令弟も日夜勉強をこたらせ玉ふことは無き故案ぜさせ玉はるな。……唯今令弟健康はよろしきゆゑ来月試験二えたへ申すべし、それは御安心下さるべし」と準備万端の旨申し送っている⁷⁷。しかし、豈図らんや、試験の結果を伝える手紙には「さて此度御令弟試験不合格なりしは遺憾にたへず」と残念な結果を報告しなければならなかった。少々反省の弁を交えて、「しかし、ひろき眼よりみれば悲しみ悔む等はずまらぬ事ゆゑ、孜々として進む丈すゝめばそれにてよし。そは幾度も御令弟に申し上げ、御両親様へも聞えあげし所、兄もその心なるべしと存ず。されど罪とみれば小生の注意も足らざりしならむ、さあれそはあらかしめ兄に約束せし事ゆゑ、深くはとかめ玉ふまじ。唯々未来に於て成功を期せむ精神を持続し玉はむことをいののみ」と残念な結果を嘆じながらも、次年度へ向かって引き続き世話を約束している⁷⁸。

入学試験に失敗した常音は、しばらく故郷の湖北延勝寺に帰省した。「御令弟も故郷の和氣中に入りて苦をわすれしものゝ如く唯今長き御文あり」と、常観を少し安心させている。常音は10月になると、再び東京に帰り、しばらく久保のところに引き続き厄介になる。進路については、同じ頃常音自身が常観に出した手紙に、「久保師とも相談の上、英語専門の正則学校に明日より出席申す事と決し申たり。本年一年は唯語学を正課として勉強申し度微意に侍り。御了承下されたし」とあり⁷⁹、同様の内容は、久保から出された、書簡にもある。同書簡には「令弟過日御帰京あり今度正則英語学校（斎藤秀三郎氏の）入学。主として英語をやり他の科にも予修の筈、今年度はぜひ成就いたしたきもの也」と報告している。

常音の進学問題について、常観はもう一人相談を持ちかけていた人物がいた。それは常観の実母側のいとこである丸山環である。丸山は当時文部省の文部視官を務め、のち旧制第六高等学校（岡山大学の前身校の一つ）や旧制甲南高等学校の校長を務めた。丸山は教育行政の専門家という立場から、ちょうど入学試験制度が改正された時期でもあり、常観にも色々助言を与えている。例えば、丸山からの返信には、「一昨年より高等学校入学試験一定せられるに、第一之志願者自然と多数に相成、不合格者も随て増加致候。御令弟にも御氣之毒之至に候」との

盟友、近角常観と久保猪之吉一求道会館に残された書簡をめぐって（三宅）

コメントに加え志望校の決定に関して、郷里の年老いた両親のことなどを気遣って、次のようなアドバイスをしている⁸⁰⁾。

本年も矢張り第一高校^江入学可致と之御考に候哉、小生之考にては第一^江入学を希望するものは非常之多数故合格はなかへ容易ならざる事と考申候。一度位之不合格は決して恥るに足らざるも、二度三度不合格と相成候ては或は学問之方針をあやまらざるかとも懸念いたし候。殊に御両親も御老体之事故可成早く成業相成方、両親へ対しても孝行之一端かとも考申候。夫故当年は断然第一^江入学之志望を变する方将来之得策ならむと愚考致候

結局「若シ貴兄に於て昨年之御考通り御令弟をして独乙文学を専修せしめんと之御考ならば小生は第四^江入学を御す、め申候」との丸山のアドバイスを受け、常音も最終的には旧制第四高等学校への進学を決めた。

入学試験準備に余念がなかった明治35年1月、常音は「昨年十一月私久保師宅を辞して浅草大草方に転居仕り申しぬ」とこの時期転居を伝える手紙を兄常観へ出している⁸¹⁾。久保も同じく1月に年頭の挨拶を兼ねた常観への書簡で「令弟常音君の浅草本願寺大草氏方へ移転せられし一事」の顛末を詳しく報告している。これには、久保が常観を通じて浅草本願寺の大草家族とも顔見知りであったことが関係している。折しも本願寺の法主の往診に浅草本願寺を訪ねた際にこの話が持ち上がったようである⁸²⁾。「いつか適当なる所とおもひをりしも何分托すべきところ無かりし折柄その折大草夫人よりの依頼」もあって、転居が決まった。大草夫人の依頼とは、「何とぞして常サンを宅ニ来て貰ひ子息と一所に居て貰ひたし」との事。当時大草氏のご子息は「二年引きつゞきての病患にて学校も定らずぶらへるの時なりしかば丁度一所に勉強するも都合よからむとの考も」あったようである。加えて、「当時大草君は正則英語学校通学（令弟も同じ）二階には真宗大学幹事と為せる人あるのみ、来訪の客は殆ど無かるべし」と、受験勉強の環境も整っていることもあげているが、久保としては、「小生も兄より托せられたる事ゆゑ無益に他へ転ぜしむることあたはず」と責任を持って引き受けた常音のことであるので、躊躇しつつも、いくつかの条件をつけて、結局大草宅への転居を了承することにした⁸³⁾。例えば、「無条件にて移りしにはあらず。都合あしき時は何時にても戻る事」、「一週間一度は晚餐がてら必ず小生宅をとふ事」などの条件を「約定して大草氏ニ諾したり」で、この件は決着した。久保にとっては「兄」との約束を破るようで心苦しかったようだが、家も狭く、婚約中のより江との同居を始めていたこと、また、自分の耳鼻咽喉科入局で多忙になったことなど色々な事情が重なり、やむなく転居を許可せざるを得なかった。久保が常観との付き合いから、宗教家や本願寺関係の人達とも懇意にしていたことをうかがわせる話である。

しかし、常音も浅草での生活には満足の様子で、「十一月二十四日浅草にうつり二階にて太

田師の隣室にて大草君と共に起居する事となり申しぬ … 浅草に移りてよりは生活の上には充分に親切に尽し玉ひまことに愉快に過し居れり。今晚の如きも大草氏夫婦太田師、並に慧逸君私五人して神田、宝亭に西洋料理を味ひ申しつよ … 御暇もあらば一寸大草方に礼状にても差し出しおき下されたし」と兄に書き送っている⁸⁴⁾。

このあと間も無く常観も帰国し、久保も一応約束の責任を果たしたことで一息つき、その後は研究や医療に専念する。そして、翌年はより江と祝言、そして自身の留学、福岡への引っ越しと、次々に久保の将来を決定づける局面を迎えることになる。次節で詳説する。

7 久保猪之吉の人生の転機

医局入り

常観が日本を離れるに当たって弟の受験準備の助言、監督などを依頼された猪之吉であるが、この時期は猪之吉自身も卒業試験や口頭試問の準備で多忙な毎日を送っていた。「小生唯今卒業試験準備中にて寸暇無し此書状を草しはしめてよくけふ終る迄殆と一周間を要したるべし。支離滅裂の罪はゆるさせ玉へ」と、このころの常観への書簡でも忙しく卒業試験に追われる様子を報告している⁸⁵⁾。

常観が日本を離れた年、猪之吉は進路について相談するため叔父の小此木信六郎を訪ねている。小此木信六郎は猪之吉の実母の弟で、ドイツのチュービンゲン (Tübingen) 大学に留学し耳鼻咽喉科学を学び、猪之吉が医科大学に入学した1897 (明治29)年に帰朝し、東京の病院で開院し診療を始めていた。この叔父の勧めもあって、猪之吉は耳鼻咽喉科学を学ぶことを決めることになった。猪之吉は1900 (明治33)年の12月に大学を卒業し、開けて明治34年から岡田和一郎が講座主任を務める耳鼻咽喉科に入局し、すぐに副手として採用された。これによって久保の将来の進むべき道が決定的となった⁸⁶⁾。

久保の面倒をみることになる岡田和一郎は明治32年の年末に帰国し、大学でも翌1月に初めて医科大学の講座として耳鼻咽喉科学が一講座開設されることになり、岡田が助教授として耳鼻咽喉科学講座担任についた。久保は明治33年12月に卒業するとすぐに医局の手伝いを始め、翌1月から最初の学士入局者として正式に岡田の教室に加わり、これ以後医務、雑用などが生活の中心となっていく。岡田は自叙伝で久保の医局入りについて、次のように書いている⁸⁷⁾。

明治34年余の教室は此年一月初めて医科大学卒業の医学士にして斯科専門を以て世に立たん決したる篤学者二人を得たり即ち久保猪之吉及浅井健吉の両氏是なり、当時余の助手定員僅かに一人にして而して菊池循一氏已に其の任にありして以て両氏は副手 (無給) の

位置に座せり

ところが、岡田の片腕ともなっていた菊池は5月にドイツへ私費留学に立ち、助手のポストが空いたため、久保がこのポストに就いて「爾今医務と雑用とを悉く統制すること」になった⁸⁸⁾。このようにこの年の正月は医局入りや加えて、母の病気もあって忙しく、常観への書簡にも「賀状ありがたく拜受仕りぬ。此正月は彼此用事に取紛れ、海外諸友へ凡て欠礼しりぬ。誠に罪深き次第なり。唯ゆるさせ玉へと申す外無し。されど心中一日も兄をわするゝ時はあらざりき」と書き送っている⁸⁹⁾。

岡田助教授は1900（明治33）年に医学博士の学位が授与され、明治35年3月に大学における初めての耳鼻咽喉科の正教授に任ぜられた。これによって耳鼻咽喉科も帝大医科大学で独立した専門講座の地位が認められることとなった。この年岡田は、帰国早々金森が同志数人で始めた大日本耳鼻咽喉科会の会頭を金森から受け継ぎ⁹⁰⁾、この後長きにわたって学会の発展に尽くすことになる。岡田が会頭につくと久保も評議員と幹事を務めることになり、岡田が亡くなるまで一番弟子として尽くすことになる。猪之吉は学会の評議員、幹事に選出されると、同時に同学会の機関紙「大日本耳鼻咽喉科会会報」の編集、発行を一任されることになる。その際、学会の事務局は久保がドイツに発つまで本郷丸山新町の久保の自宅に置かれて⁹¹⁾、久保は機関紙発行の仕事でも一目置かれるほどの才能を発揮した。

久保と一緒に最初の学士入局者として医局に加わった副手浅井健吉は、助手の定員が2名に増員されたことに伴って、1902（明治35）年助手になった。しかし、その後すぐに京都医科大学耳鼻咽喉科講師に任命され、同病院の耳鼻咽喉科主任の職に就き、京都へ赴任した。これによって、京都医科大学にも耳鼻咽喉科が成立したことになる。一方、久保は翌年留学のためドイツに発つが、留学中、京都帝国大学助教授の任を受け、帰国後京都帝国大学福岡医科大学の教授となる。この経緯について岡田は自伝で次のように明かしている⁹²⁾。

此年（明治36年）特筆すべき事あり政府は近き将来に於て福岡医科大学を新設するの国是を決定せんが為め先ず各科教授候補者を選定するに当り我科に於ては助手久保猪之吉氏を其候補者に採用し5月27日を以て独逸国留学を命じ6月27日を以て出発せしめたること是れなり

この猪之吉が福岡医科大学に採用された経緯については杉野大沢も『日本医事新報』で興味ある話を語っている⁹³⁾。やはりこの人事には猪之吉の叔父小比木が関わっていた。「久保猪之吉先生を語る」という座談会の記事から大野喜伊次氏の談話を引いたもので、これによると、福岡医科大に耳鼻咽喉科が新設される話が新聞で報道されると、猪之吉の叔父小比木が、知り合

いでちょうど外国に行く直前の後藤新平を呼んで、福岡医大で久保を採用するよう大森学長に頼んでもらえないかと依頼している。しばらくして岡田助教授から猪之吉が呼び出され、大森学長から教授候補として回して欲しいと頼まれた旨を久保に伝えた。久保はすぐに相談のため小此木を訪ねるが、小此木はこの件については何も知らないふりをして、申し入れを受けるよう勧めている。このような経緯もあって、福岡医科大教授候補に上がり、留学に出てすぐポストを得たというわけである。

日本耳鼻咽喉科会が設立された時期には全国に7つの医学専門学校が開校されていたが、久保が留学から帰ると福岡医科大学に耳鼻咽喉科を開設し、初代の教授となり、しばしば日本の耳鼻咽喉科の先駆者といわれるほど大きな業績をあげ、日本近代耳鼻咽喉科学の「鼻祖」と呼ばれるにふさわしい活躍をした。特に臨床医学方面で手術法の改善や新しい手術法の創意、後進の指導などでは幾多の輝かしい業績を残している。1924（大正13）年岡田が定年退職した時には、久保も後任の教授候補にあがったほどである⁹⁴⁾。恩師岡田教授には終生弟子として機会あるごとに、全力で助力を惜しまなかった。

医局入りをはたした頃から、久保も当然ながら歌壇からも次第に遠のき、医学に専念するようになる。このころのエピソードをのちに「東大助手時代の思出」として書いているが⁹⁵⁾、常観へ出した書簡にも、助手としての当時の生活に少し触れている箇所がある。例えば、「宿直三日四日毎に一度つゝあり、留守がちにする事多きこれなり。又日中とても夕方迄病院にくらすを常とする有様也」⁹⁶⁾、「新法主神経衰弱症にて鼻病より来りしものをなやみき、しかるに吾科の主任岡田博士往診手術せられ小生も同伴して手伝ひ、又代診にも度々出入せり」、「小生も此春より開業して登院前二時間位つゝ患者をみる積也、生活上の都合より也」⁹⁷⁾といった具合である。書簡にある、帝大耳鼻咽喉科主任の岡田博士が手術をし、久保がその助手を務め、また代診にも度々行ったという「新法主」とは真宗大谷派の第23代法主大谷光演（彰如）で⁹⁸⁾、俳人でもあり、その俳号から句仏上人と呼ばれていた人物である。近角常観とも関係が深く、その関係で実現したのかもしれない。ちなみに、この助手時代文豪高山樗牛の喉頭も診察している⁹⁹⁾。そうした縁か、猪之吉は明治35年には高山樗牛が主幹をしていた雑誌『太陽』に数本の論説を発表しているが¹⁰⁰⁾、残念なことに、高山はこの年肺結核で世を去った。

この猪之吉の助手時代、明治34年には、もう一人治療に関係した有名人が亡くなっている。中江兆民である。この年の10月に常観に出した手紙には兆民の著書送付について、次のようにある¹⁰¹⁾。

藤岡兄御出発に際し兆民中江篤介氏生前の遺稿一年有半続一年有半二部呈上せむと求め来りしが航路万里の所御邪魔と存せられ御頼み申すことは此手紙のみとして該二部は郵便に托す

盟友、近角常観と久保猪之吉—求道会館に残された書簡をめぐって（三宅）

この兆民の『一年有半』は、この年喉頭癌で余命幾許の診断を受けながらも、6月初めに書き始め、9月には博文堂から初版が出版されるという、前例のない速さで世に出た本である。有名な著者による「生前の遺稿」とあって、非常な反響を呼び、初版1万部は3日で売り切れ、翌年9月までに23版を重ねて、20余万部を売り尽くす世紀のベストセラーとなった。また続く『続一年有半』はそれからひと月ほどで書き上げ、10月に出版されるや、やはり大きな反響を呼び、初版から一ヶ月で12版、3万刷弱が印刷されたという¹⁰²⁾。久保のこの手紙は10月末に書かれているので、発売直後に購入し、藤岡に託そうとしたことになる¹⁰³⁾。

兆民は診察のため大阪に行き、そこでこの書を書き始め、9月に帰京している。帰京するとすぐに岡田和一郎が兆民のもとに往診に駆けつけた。兆民は最初は死期が迫っていることを知り、『続一年有半』の起稿を断念していたが、岡田が、4、5ヶ月に起こる障害は薬で取り除くと保証したため、安心して執筆を始めたと岡田は後に回顧している¹⁰⁴⁾。他の事例から察すると、岡田の診察にも助手の久保が立ち会っていた可能性が大いにある。兆民はその年の末に死去した。

婚約と結婚

先に、紅葉山人の佐渡の記事について猪之吉がコメントを寄せた逸話を紹介したが、そこではその4年前の四国漫遊についても語られていた。実は、この讃岐をはじめとする四国漫遊の旅の主たる目的は松山訪問にあった。1895（明治28）年、第一高等学校最後の夏休み中のことである。ちょうど上京して高等中学の受験準備をしていた時、下宿をさせてもらった梶浦釜次郎が当時西条の鉾山で働いていたこともあり、また尋常中学時代の恩師が松山中学に赴任していたこともあり、彼らに再会するための旅行であった。久保は松山には数日滞在していた。そして、松山は結婚相手となる宮本より江の故郷であった。当時より江の父正良は梶浦釜次郎が働いていた市之川鉾山の支配人を務めていた。より江がのちに上京した時、どのようなきっかけで猪之吉と会ったのかはわからないが、この時の松山の話が話題になったであろうことは想像に難くない。

実は、より江との婚約、結婚については当時猪之吉が常観に出した手紙にも報告されていて、貴重な生の声が残されている¹⁰⁵⁾。少し長くなるが、全文を引用しておく。

予は結婚の約束を結びたり。かゝる折兄のこの地にあらざるは無上の苦也。事ある毎に兄をおもひいで申しぬ。結婚の標準も理想も所持しをりたれど理想を實在せしむるは誠にかたく若ヲラルコンメンハイトを期しえずばこれをとらむと決しての事なりき。本人今年十八歳今第二高等女学校第三年に在り名は宮本頼江産地は四国松山也。常音君よく知れり。有らゆる縁談を押しのかけてこれと定めしも唯奇縁と申す外無し。学問の質と性質とがよか

るべしと存じたる次第財産家にもあらず門閥にもあらず。予の処置は到底当国才子の譏を免れざるべし。唯おのれの心に定めし事故悔い申すまじ。たゞ〜計るべき兄のあらざりしを憾むのみ。正式の結婚は凡二年后を期せむ考。そは他にあらず小生唯今の境遇自活の途だに付かず。又当人勉学の最中故せめて学校だに卒へたらむ后との考なれば也。過般当人の父君も上京せられたれば双方約束の交換を為しおけり。

「フヨルコンメンハイト」とはドイツ語の“Vollkommenheit”「完璧」の意味で、猪之吉の理想の伴侶とはどのような人を描いていたのかはわからないが、より江は少し理想とは違ったようであるが、それでも結婚の約束をしたことについて、「予の処置は到底当国才子の譏を免れざるべし」とかなり世間体が気になっていたことがわかる。「唯おのれの心に定めし事故悔い申すまじ」と納得していることを伝えている。しかし、本当のところはより江との結婚については心から満足していたに違いない。

婚約者より江（頼江）は書簡に「今第二高等女学校第三年に在り」とあるように、1899（明治32）年に上京し東京府立第二高等女学校の補習科に入学した。書簡に「有らゆる縁談を押しつけて」とあるように、猪之吉の両親も再三縁談を持ち込んで、猪之吉を説得しようとしていたようで、より江との結婚にも諸手を挙げて賛成したわけではなかった。しかし、結局は「よめぬすみ」とまではなかったにせよ、二人はめでたく結ばれることになった¹⁰⁶⁾。「過般当人の父君も上京せられたれば双方約束の交換を為しおけり」とあり、この時点で事実上の結婚生活を始めたと思われる。このことは、まだ正式な結婚前ではあったが『明星』誌上に「小百合」と題した歌18句が「ゐの吉・より江」の連名で掲載されていることから窺える¹⁰⁷⁾。「百合剪ると相携へて入りし山 神のねたみをこわしと思ひき」を始め、2人の初々しさと、幸せそうな様子が窺える歌が並んでいる。さらに、『明星』の翌月号には、久保より江の名前で「別れ路」、翌年には同じく「久保より江」は「京紅」と題した小文を投稿し、二人の仲は事実上夫婦と公認されていたことがわかる¹⁰⁸⁾。

このように、すでに出会いからまもなくして、二人の仲は半ば公になっていた。1901年10月に出された書簡には「内縁のより江同居しをる」とあり、また同年10月に弟常音から常観に出された書簡には「何分御結婚後の事とて、先生と御同居を願ふのみは相方ともにあまり宜しかるまじきかと話しあひ居れり」と常音がそれまで世話になっていた猪之吉宅からの転居の理由に彼らの「同居」をあげている箇所があることから明らかである。正式な結婚は予定通りより江の卒業を待って1903（明治36）年5月に婚姻届が出されたが、猪之吉は直後により江を残してドイツへ旅立った。

留学

猪之吉は結婚すると、ひと月足らずで新妻を残してドイツのフライブルグ大学に留学する¹⁰⁹⁾。実はこの留学についても、久保の書簡から今まで知られなかった経緯が明らかになる。実際には猪之吉の留学は、当初の予定ではその一年前に実現するはずであった。猪之吉は事前に常観に対して、「次の事は未だ確定せしことにあらざれば二三の知己恩人にもらしたるのみ。未定には属すれど、兄にももらす事をえ禁せず」と期待と嬉しさがにじみ出た前置きをして、次のように「漏らし」ている¹¹⁰⁾。

来年初めは小弟も御地へゆけるかもしれず、その確定は八月末には確定仕らむ。二三年間御地にて唯たゞ勉強しうる方法を寧ろ場所を大学の或教授よりせはせられたり。今その約として条件を付けて申しおくりたれば、その返事の来次第即ち八月末迄には確定せむ。

そして留学先については、「若往くことにして定らば果されなば地はフライブルヒなるべし。兄とライン河時ニ相見るも難きにあらざらむ」と、常観との再会を夢見ている。ところが、期待に反して、先方の事情で翌年の留学は叶わなくなる。次の書簡で、先方からの返事が報告されている¹¹¹⁾。遅筆を「今度は続々留学生かの地へ向ふに就き更に兄の許を恋ひしうおもひいたし責められたるこゝちとなり筆とり申しぬ」と詫び、

兄よ、かの地にてライン河畔にてとおもひしも望たえぬ。過日かの地より返書ありたるに、かの教授今は病気にて転地保養中のよし断り来れり。残念至極なれどもやむ無し。機を待らむ。当地にも数多くやるべき仕事、やりかけたる仕事あり、それを楽みとして。

とある。この時期に常音が兄に出した書簡でもやはりこのことに触れ¹¹²⁾、「かねては久保先生も本年にも御渡欧の考なるも、情実上已むをえぬ節のありとかにて今明両年は御延しありつる義に侍り。生の為めには実に嬉しくおぼえ申しぬ」といささか本音を交えて、伝えている。

結局一年遅れで留学が実現する。『官報』には「留学生出発」として、「東京帝国大学医科大学助教授高山正雄、同榊保三郎、同学助手久保猪之吉は同27日孰も出発せり（文部省）」とある¹¹³⁾。ドイツでは当初から希望していたフライブルグ大学でグスタフ・キリアン教授に師事し、帰朝は1907年の正月。留学中に京都帝国大学福岡医科大学（後の九州帝国大学医科大学）助教授に就任し、帰国後新たに開設された同大学耳鼻咽喉科の初代教授に就任した。以後28年間に多くの門下生、弟子を育て、久保一家として名を馳せた。しかし、留学に際しては葛藤もあった。故郷に残した両親との関係もその一つであった。あれやこれや思い悩み、つい弱気になり、常観に「嗚呼不幸なる此小弟をわするゝな。確定せむには又々申し上げむ。必ず助力を

玉へ」と頼る。

親、兄弟

猪之吉は幼い頃から貧困に苦しむ家庭に育ちながら、自分の境遇には弱音一つ吐かず、弟や妹を助けたことはよく知られている。杉野大沢は久保の幼い時の話などを聞き、「感極まつてみぶるいした。これあるかな、これあるかな。艱難汝を玉にす（旧い言葉であるが）」と、この言葉がほんとうにピッタリするのは久保博士である」と語っている¹¹⁴⁾。猪之吉自身も子供の頃からの苦勞話はしばしば思い出として語っている。しかし、常観に宛てた書簡では、単なる苦勞話ではない本音が語られている。幼い時ばかりではなく、学生時代も孤軍奮闘しつつ、つい常観を兄と頼っていたのも理解できる。

留学計画が具体的になりつつあった時、資金や両親などについて常観に打ち明けた話がある¹¹⁵⁾。「旅費及び出発後弟の学資、家許への送金それ等が目下の難問也、それ等を切つてのけらるれば多分望は叶ふべしと存ず」がそれである。「弟の学費」とあるが、猪之吉は異母弟護躬や異母妹キクの面倒をよくみて、小中学校時代は護躬を自分の背に負いながら自分の仕事をし、またよく遊び相手となっていたエピソードはしばしば引用される場所である。その弟護躬がちょうど常観が日本を発ったのと時を同じくして上京している¹¹⁶⁾。猪之吉は護躬を自分のところに引き取り、高等学校入学試験の準備をさせている。ちょうど、常音も久保宅に下宿していたことから、常観への最初の書簡では常音の近況を伝えながら、護躬にも言及して、「毎朝冷水拭操、その他器械体操等も小生の弟とせらるゝに就き身体は全体に於て健全、器械体操も余程得意となられたり」などと書いている¹¹⁷⁾。護躬は常音と同じ旧制第四高等学校に入学し、のち東京帝大に入り、千葉大学耳鼻咽喉科の教授となった。

当時は弟の学費や生活費の面倒に加えて、両親の世話もあった。常観に対して「故郷には安全たる家庭を有し、悠々として万里の征途に上れり、吾は家産無く、一頃の田も無く、繫累多く、負債多し。一身軽く志を達し能はず」と羨み、思わず愚痴も出る。「あゝ兄よ、これより年末迄半年その間筆を奮ひ如何にもして支出額、弟の学資等の一部を作り他は負債としても宿昔の志を果さむと欲す」と、勉学のかたわら、生活費や弟の養育費の工面に頭を痛めている。「これより年末迄半年その間筆を奮ひ」とあるが、雑誌などへの投稿によるわずかな原稿料も重要な収入源になっていたことがうかがえる。

加えて、両親の期待に添えないことに対する葛藤も悩みの種で、心が揺れる。朗報であるはずの留学についても、未だ両親に知らせられない悩みが打ち明けられている。両親への懺悔や弱音の露呈は、当時の猪之吉の内面の赤裸々な告白となっていて、注目に値する。少し長くなるが、そのまま引用する¹¹⁸⁾。

盟友、近角常観と久保猪之吉一求道会館に残された書簡をめぐって（三宅）

兄よ、更にあはれと思へ。小弟はまた此来るべき吉報を家の父、母に聞ええざる不幸者也。何を以てか、父母は大学卒業を以て何を此一身に待ち設けしぞ。誠ニ他人は月俸二百乃至は二百五拾をえて地方ニ赴き病院長たらむ、或は堂々門戸をはりて父祖の産をして益嵩からしむ、之ニ反して小弟の状態を哀め、積年の苦より父母を脱せしむることあたはず。十年の苦学ニ尋ぐに大学院の入学を以てし更ニ前途茫々期しかたき学术界ニ入らむとす。父母の予望は着々として破れ、人は悦べとも父母は樂まず、父母の予期の如く所謂現世の某地期定まらぬにはやくも故山をすて、海を渉らむとす。われには大なるもの、遠きもの、高きもの明きものそれ等のみ、見ゆれども考の地盤を異ニする父を如何せむ、母を如何せむ、これ八月の来らざる今日告げまつることの忍びざる所以也、あゝ兄よ、これ不幸の兄か、不孝の奴か、かの小なるものを欲すればわれ大なるものを捨てざるべからず。彼果して小か大か、これ大か小か嗚呼兄迷へり

この引用では、常観の境遇を羨むような言い方がされているが、常観も実際にはそれほど恵まれた境遇にあったわけではなかった。留学の際も、故郷の老いた両親や受験を控えた弟、さらには常観を頼る叔父等を残しての渡欧であり、また自坊の檀家にも、十分責任を果たせない負い目を感じざるを得なく、決して「一身軽く志を達し」ていたわけではなかった¹¹⁹⁾。

学生生活から医局での副手時代も終わり、岡田の助手になると俸給が支給された。常観への手紙では相変わらずの借金生活で困窮ぶりを訴えているが、この時期の久保については別に興味ある報告がある。『医人文人』に大野喜伊次の談として次のようにある¹²⁰⁾。

白山丸山に新居を構えられてからもしばしば伺つて、先生が朝夕一、二時間の内職的診療の月収300円内外で、当時の普通開業医よりも遙かな豪勢を示されていたことも知っています

上段の書簡引用部分後半に続いて、世間並みに両親の期待に添えないことに対する葛藤、悩みなど胸の内を常観に打ち明ける箇所がある。「父母の予望は着々として破れ、人は悦べとも父母は樂まず。考の地盤を異ニする父を如何せむ、母を如何せむ」。世代の違いと言ってしまうとそれだけであるが、孝養を尽くした両親だけに、胸が痛んだことであろう。その養母ミツは猪之吉に結婚を断念させるため上京中、腸チフスで死去した¹²¹⁾。常観宛の書簡には一箇所だけ、母親について触れている部分がある。やはり1901（明治34）年4月に書かれた書簡で、乳癌を患っていたとある¹²²⁾。

十二月三十一日といふに帰省いたし数日間故里の人々間にせはしき日を送り帰京匆々母の

病となり、直ちに上京大学医院唯今殆と全快旬日ならずして帰宅えむ考也。病は乳癌にして右腺を悉く摘出仕りぬ。幸平坦なる経過をとり無事治癒せしは案外の仕合なりき。御安心下されたし。

一方、父親に関しては常観宛の書簡で直接触れた箇所はない。しかし、父親については比較的良好に知られているようで、久保の評伝ではかなり詳しく説明されている。この父も1915(大正4)年に亡くなっている。この年11月には計画から10年以上経てやっと常観が念願としていた求道会館も完成し、落慶式が執り行なわれた。猪之吉はそのひと月ほど前に常観宛に書簡を出し、「今回亡父常保記念として求道会館設立費中に金子三百円寄付致したい」と申し出て、送金している¹²³⁾。

猪之吉の母は、猪之吉が生まれると一週間で家風に合わないという理由で実家に返され、乳母の手で育てられたことはよく知られているが、猪之吉の祖母については評伝でも語られたことはない¹²⁴⁾。ところが実は猪之吉は「お祖母ちゃん子」でもあった。猪之吉の祖母について、佐渡への紀行文中で思い出を綴っている箇所がある¹²⁵⁾。

ひとつは往路北越に向かう車中、川中島あたりにさしかかり、生前祖母が念願にしていたものの参詣がかなわなかった善光寺を想いながら「亡き祖母のねものがたりによく聞きし／川中島をけふ見つるかも」「一度は息の内にと誓へりし祖母／いまさぬがうらみなりけり」と歌を詠んでいる場面である。そこで、祖母について、「予が祖母といふは念佛宗の信者にして寺詣等怠らざりき。されば予も小学に通ひそめたる年頃よりそのみ供して受戒式や法話やなどへ臨みし事もあり」と、幼い頃手を引かれて寺参りをした思い出を綴っている。久保が医学生でありながら、宗教運動に打ち込む近角らと親しく付き合い、自分も青年仏教徒同盟の会員に加わったりしたのは、幼い時に祖母に導かれた仏縁があったからだと言えよう。久保は佐渡からの帰路、善光寺に詣でてお札を受け、戒壇めぐりをしている。その時に詠んだ歌として、「亡き祖母に逢ふ事もやと戒壇を／二度三度めぐりつるかな」が残されている。

猪之吉が留学から帰ると、早々に夫婦で福岡へ発った。正月の帰国であったが、すぐに九州へ向かった。美しい文字で書かれたより江から常音への年賀状には、「おめでたう ことしは常音さんの御年ですね、御きげんよう御暮し遊ばせよ 一月一日」と別れの言葉が書かれていた。明治40年、未歳で、常音24歳の正月であった。そのあとに「都にての最後の新年に候より江」と添えられていた¹²⁶⁾。

柳田國男の書いた『婚姻の話』という本に「嫁盗み」という一編があり、そのはじめに「久保より江さんの『嫁ぬすみ』と題する文集の中に、同じ名の美しい一小編が出ているが」と紹介されている¹²⁷⁾。より江の「よめぬすみ」や「松の内日記」等¹²⁸⁾、いくつかの「美しい」短

盟友、近角常観と久保猪之吉—求道会館に残された書簡をめぐって（三宅）

編には、博多での猪之吉とより江の日常がさりげなく散りばめられていて、当時の二人の微笑ましい生活ぶりを窺うことができる。

求道会館に残された久保からの書簡類としては、福岡からのハガキが2、3通あるだけで、その後常観と猪之吉の間にどの程度の付き合いがあったのかは不明である。しかし、二人はそれぞれの道で歴史に残る仕事を成し遂げた。明治、大正、昭和と生き抜いた二人であったが、この小論では明治後半期の二人の出会いと、互いに信頼し合い、切磋琢磨し合った姿を追った。

8 おわりに

東京帝大時代からの恩師岡田教授が退官すると、久保は岡田氏に自叙伝を書くようにすすめた¹²⁹⁾。仕事が一段落したころ岡田も乗り気になって書き始めたが、自叙伝は結局岡田の40歳台頃についてまでしか執筆できず、ここで「手記終わり」と記されることになった¹³⁰⁾。岡田は間も無く1938（昭和13）年5月に亡くなった。久保は未完であったがこの『自叙伝』に「岡田和一郎先生自叙伝のはじめに」と序文を書いて、同年9月の『耳鼻咽喉科』に掲載した¹³¹⁾。しかしこの時はすでに久保も病床についていて、序文の終わりには「病床にて筆記せしむ」とあり、結局久保も後を追うように翌1939（昭和14）年11月12日に息を引き取った。享年66歳であった。慈明院殿光誉仁道文昭大居士。

久保より江は猪之吉との別れについて、「雷の如く」と題して『四三会誌』に書いている¹³²⁾。「あまりにもあわたゞしい主人の死、主人は私にさへ最後の言葉を残してはくれなかった。……大藤さんが言った『先生はやつぱり雷の性ですね。亡くなるのまで雷のようだ』……すべては運命、せめては安らかな最期をよろこんでみやう。遺言一つないといふ事も平常から説明のきらひな結論ばかりいふ主人としてはふさはしいのかも知れぬ（昭和15、3、3記）。」

翌年猪之吉の百か日忌に際して、より江から常観宛に葬儀弔辞お礼を兼ねて供養の品が送られていて、その際添えられていた挨拶状が求道会館に残されている¹³³⁾。そして、より江もその2年後の1941（昭和16）年に57歳の生涯を閉じた。その年末、近角常観も心臓衰弱症で浄土に還られた。法名は求道院積常観。

注

- 1) 本稿執筆にあたっては「近角常観研究資料サイト」(<http://chikazumi.cc.osaka-kyoiku.ac.jp/index.html>)の書簡並びに蔵書を利用した。書簡の閲覧、使用許可をいただいた求道会館館長近角真一氏に感謝したい。また、資料は、大阪教育大学岩田文昭教授を代表とするJSPS科研費16K02181の助成によって作成されたものを利用させていただいた。
- 2) 岩田文昭『近代仏教と青年—近角常観とその時代』岩波書店、2014年。柴田浩一『評伝 耳鼻咽喉科

- のパイオニア久保猪之吉』梓書院、2018年。
- 3) 求道会館は当時の東京市森川町、現本郷6丁目の東京大学正門近くにある（詳しくは、近角巖子『求道学舎再生—集合住宅に甦った武田五一の大正建築』学芸出版社、2008年、を参照）。求道会館に保管されている書簡の目録は求道会館の「近角常観研究資料サイト」で閲覧できる。（<http://chikazumi.cc.osaka-kyoiku.ac.jp/index.html>）
 - 4) ここでは、特に二人の将来を左右するような出来事に限り言及することにし、詳しい書簡の解題は別稿に譲ることにする。なお久保への書簡の翻刻は、立命館大学大学院文学研究科日本文学専修博士後期課程在学中の池田彩音さんをお願いした。
 - 5) 久保猪之吉「『ベルリン』の友を憶ふ」『明星』12号、東京新詩社、1901（明治34）年5月、36頁。
 - 6) 当時の教育制度では、在学年数は尋常中学は5年、高等中学予科は3年、本科2年であった。
 - 7) 杉野大沢「医人文人あれこれ 長塚節と久保猪之吉（20）」『日本医事新報』No.1861、1939（昭和34）年12月26日、66頁。なお、福岡市総合図書館文学・文書課の神谷優子氏による「久保猪之吉と近角常観—「明星」「『ベルリン』の友を憶ふ」を中心として」（2018年）もここで扱う求道会館資料の書簡にもとづいた論考である。
 - 8) その他にも若干あるが、明示されていないが、杉野からの引用と考えられる。なお、杉野はこの引用部分の後で、久保と近角について、近角の編集し、大日本仏教青年会第八回積尊降誕会で配布された『星月夜』に久保が「日蓮聖人」を執筆したことを、その末行十句を引用して紹介している。
 - 9) 久保猪之吉「『ベルリン』の友を憶ふ」『明星』36-39頁。
 - 10) 当時、帝大の文科は3年、医科は4年制であった。さらに、この時期二人を近づけた要因と考えられるのは語学である。当時高等学校の入学試験にはドイツ語の試験も含まれ、さらに、一高の前身は東京英語学校であったこともあり、語学は科目として重視されていた。常観や久保など宗教哲学や医学を専攻する学生にとっては、ドイツ語は必修といっても過言ではないほど重要な科目で、授業時間数も多かった（当時、一高では語学の授業は全体の3、4割であった）。したがって、学年は違うものの二人は共通する友人や活動も多かったと考えられる。
 - 11) 明治33年9月から正式に全寮制となった（秦郁彦『旧制高校物語』文藝春秋、2003年、34頁）。近角は「寮長」もつとめた（岩田文昭『近代仏教と青年』、34頁）。
 - 12) 久保猪之吉「『ベルリン』の友を憶ふ」『明星』、36頁。
 - 13) 岩田文昭『近代仏教と青年—近角常観とその時代』、35頁。
 - 14) 久保猪之吉「『ベルリン』の友を憶ふ」、38頁。「回心」体験については近角常観『懺悔録』文明堂、1979年（第3版）15-31頁。
 - 15) 久保はこの時期（明治33年10月現在）東京帝大第3年に在学し、常観との本格的な付き合いが始まっている。またこの時期同じ大学院には、後に求道会館を設計する武田五一も在籍していた。ちなみに武田の研究題目は「採光及音響に関する事項」であった。
 - 16) 同上、39頁。
 - 17) 岩田文昭『近代仏教と青年—近角常観とその時代』、34頁。元良は信仰告白を心理学的、宗教的に掘り下げようと「宗教的経験談話会」を開催していたが、常観もこの会に参加していた。（同36頁）
 - 18) 例えば、清沢満之の始めた浩々洞の三羽鳥の一人と称された暁鳥敏による「真岡湛海君を送る」と題した送詞（彼が故郷に帰ることになり、その際彼を送る言葉として語られた記事）が『政教時報』に掲載されているが、そこに「足下は真宗高田派の僧、而して宗教問題に狂奔せるか為めに、近角常観君と共に大学院を除名せられしをのしる我らは、足下尋常一様の僧にあらざるを知る」とある（第67号、

- 明治34年11月)。なお、真岡湛海とは特に常観がドイツ滞在中、大日本仏教徒同盟会の機関紙『政教時報』を支えた一人である。
- 19) 例えば、「久保猪之吉」(昭和女子大学近代文学研究室編『近代文学研究選書』第45巻、昭和52年7月、昭和女子大近代文化研究所、128頁)。
 - 20) 日本で初めて「耳鼻咽喉科」の名称を創設したのもこの金森英五郎であった。(『岡田』、232頁) 欧米では耳鼻と咽喉は独立した別の医科であったが、金森は帰朝後日本独自の「耳鼻咽喉科」を創設した。
 - 21) 岡田等の医療受け入れ病院の一つに上野の丸茂病院があった。外科と皮膚科を備えた病院で、丸茂むね(日本で7番目の女性医師)は夫文良が若くしてがんで亡くなったため跡を継いで日本で最初の女性病院長になった。彼女は求道会館にも通い、常観の妻キノや弟常音なども親しく付き合いがあった。(岩田文昭『近代仏教と青年—近角常観とその時代』、94頁)
 - 22) 204頁に岡田氏の自叙伝「教室開設当時」からの引用として書かれている。
 - 23) 『東京帝国大学一覽』(33-34年)では、明治34年7月の卒業者の一覽に名前がある。つまり、33年度卒業生である。
 - 24) 『反省会雑誌』は首巻が1887(明治20)年8月に刊行された。また、『政教時報』は1899年に第1号が出た。なお、大日本仏教徒同盟会は発足当時は「仏教徒国民同盟会」という名称であった。
 - 25) 1901(明治34)年4月9日付、久保猪之吉差出・近角常観宛、求道会館資料10095。
 - 26) この広告文は『政教時報』(第9号、1899(明治32)年5月号)などに掲載されたもの。
 - 27) 久保猪之吉「雲水雑記(1)」『政教時報』第20号、大日本仏教徒同盟会、1899(明治32)年、14頁。
 - 28) 久保猪之吉「『ベルリン』の友を憶ふ」、38、39頁。
 - 29) 与謝野鉄幹による「新詩社」など。
 - 30) 久保猪之吉「いかづち会時代の思出」『立命館文学』第2巻第6号、立命館大学人文学会、1935(昭和10)年、772-776頁。『立命館文学』のこの号は「あさ香社及新詩社」の特集で、久保の小論は与謝野鉄幹の訃報に接し、鉄幹を追悼して書かれたものである。なお、この久保の回想について永岡健右は「いかづち会の結社的特質—組織的特色を中心として」(『文語』第32号、日本大学国文学会、1969(昭和44)年)で、当時久保が医科大学の2年というのは久保の記憶違いで、3年であったとコメントしているが、当時帝大の学年暦は9月に始まり7月に終わっているので、31年6月30日現在では猪之吉はまだ2年生で、記憶に間違いはなかった。いかづち会は明治33年に久保が小石川原町に引っ越し、服部の住まいに事務所を置くまで正念寺に置かれていた。
 - 31) 久保猪之吉「歌人の品性の下落」『反省会雑誌』第13年第5号、1898(明治31)年5月、35-38頁。
 - 32) 結成時の5人に加えて大伴来目雄が加わった。「いかづち会時代の思出」(『立命館文学』第2巻6号)に「大伴来目雄(文科学生)は後から来られたやうに思ふ」とある(772頁)。
 - 33) 久保猪之吉「いかづち会時代の思出」、773頁。会員の作は「いかづち会詠草」として主として読売新聞に発表されたが、これについて、読売新聞は当時文学方面に特に興味を持っていたからと説明されている。
 - 34) この会でのスピーチは『こころの華』(第3巻第1、1900(明治33)年)に「第三席」として掲載されている。「年齒弱冠の私が頭の白くなって居られる方々に対して甚だ烏訃がましい次第であるが、このような話をするのは、法に依りて人を採り、人に依て法を採らずといふ私の精神である」と堂々のスピーチであった。
 - 35) 歌の形式についても一言あって、区切り方から生じる歌の「調」について改良の余地があるとの持論も展開している。久保猪之吉「第三席」『こころの華』(第3巻第1)、24-31頁。

- 36) 「落合直文先生の満廿五年忌に」、1頁。落合直文氏の25回忌にあたり、追悼会が開かれる予定であったが、久保は公務で出席が叶わず、当日朝開かれた萩逓舎会で話した思い出の口述筆記がこの『廿五年忌に』である（『廿五年忌に』の付記による）。談話の「口述筆記」である点に注意がいる。
- 37) 落合直文『言泉：日本大辞典』大倉書店、1898（明治31）年。
- 38) 当初の発行予定の年には他にも辞典が数点出たため2年延期して出版にこぎつけたという事情があった。
- 39) 当時の帝大の授業料は25-30円で、今の価値からいえば70-90万ほどになる。ちなみに当時の小学校教員の給与は月8-10円ほどであった。（「明治人の俸給」<http://sirakawa.b.la9.jp/Coin/J022.htm>）
- 40) 写真帖にある、祝賀写真係代表飯田武雄氏の「緒言」とより江夫人による「をはりに」から。
- 41) 落合直文「こよひの友」『萩之家遺稿』明治書院、明治37年5月、404-407頁。（落合直文の遺稿として落合直幸が発行者）
- 42) 猪之吉は「落合直文先生の満廿五年忌に」で、「明治30年9月11日」の夜の出来事として触れている。
- 43) 久保の吉「落合直文先生の思出」『九州大学新聞』1933（昭和8）年12月20日、8面。
- 44) 落合が名刺の裏に「やす〜も三年は待たむかへり来てわが死なむ時脈とらせ君」と書いて猪之吉に渡した歌。『廿五年忌に』には「やすやすも待ちてをいませ三年へば君がくすりを見いでてかへらむ」と答えたとある。より江の歌は、新婚で一人残された腹立たしさも込められているように読める。
- 45) 久保の吉「いかづち物語（1）—（其5完結）」『女学雑誌』女学雑誌社、1899（明治32）年5月（第488号）から8月号（第495号）に連載された。完結編の最後に「明治31年12月25日 クリスマスの記念に徹夜して誌す」とある。
- 46) 猪之吉が亡くなって、四三会誌の追悼号により江が寄せた小文は「雷（いかづち）の如く」と題されていた。本稿「おわりに」を参照のこと。
- 47) 1900（明治33）年7月30日付、久保猪之吉差出・近角常観宛、求道会館資料10091。
- 48) あさ香社でも一緒であった与謝野鉄幹が亡くなった時に久保が書いた「いかづち会時代の思出」という小文にこの「いかづち館」に触れた箇所がある（『立命館文学』第2巻6号）。そこで、房州を訪れた際海水浴場高崎に新しく旅館が落成し、久保が「いかづち館」と命名したとの一文がある。
- 49) 『読売新聞』1900年7月24日、朝刊6頁。久保の記事と同じ日にその批判記事が掲載されていることから、ひょっとすると「忠告生」とは読売新聞の記者の一人かもしれない。
- 50) この服部文学士とは、同じ福島県二本松生まれの中国哲学者服部宇之吉のことで、彼は当時清国留学中に義和団事件に遭遇し、北京在留の日本軍とともに籠城した。この年の終わりにはドイツ留学に発ち、久保は別の常観宛での書簡（明治34年4月9日付、求道会館資料10095）で「尚、小生郷里の文学士服部宇之吉氏も多分「ベルリン」なるべし。御あひにもならばよろしく願ひ上ぐ」と書いている。
- 51) 長塚節『佐渡が島』（『ホトトギス』第11巻12号、明治40年11月1日所載）。与謝野鉄幹も晶子と2度佐渡を訪れている（大正13年、昭和9年）。太宰治は1940年に佐渡を訪れ、翌年短編小説『佐渡』を発表した（『公論』1941年1月号）。最近では司馬遼太郎の「街道をゆく」シリーズに「奥州街道、佐渡のみち」がある。
- 52) ゐの吉「雲と水と（第一）」『読売新聞』1899（明治32）年7月31日、別冊2頁。
- 53) 「佐渡の浜風」は『読売新聞』の「月曜付録」1899年9月18日、25日、10月2日、9日。「雲水雜記」は『政教時報』1899年10月、11月、12月、1900年4月、5月、6月に7回連載。
- 54) 三宅正隆「久保猪之吉の佐渡紀行」『草紅葉—久保猪之吉とより江』福岡市文学会館、2019年、13-15頁。

- 55) 「いかづち会時代の思出」、120-12 頁。佐渡について、「数年の後、与謝野君がこの翁をたよつて佐渡に赴いたのも奇縁である」と書いている。
- 56) 久保による『星月夜』の「日蓮聖人伝」については、本稿 86 頁を参照。
- 57) 久保猪之吉「雲水雑記」『政教時報』第 20 卷、14 頁。
- 58) 久保のいう「国文体」とは日本古来の「和文」という意味ではなく、その当時の「日本語」という意味である。
- 59) 久保猪之吉「第三席」『こころの華』、25 頁。
- 60) 阿仏房の出自が佐渡新保村の農民であるという説は、例えば、児玉信雄『佐渡の五重の塔—日蓮宗妙宣寺五重塔の歴史』（刀水書房、2016）にある。
- 61) 引用は、久保の吉「啼けばさくくの古歌に就て」（『読売新聞』、1899 年 11 月 3 日朝刊 4 頁）の冒頭。
- 62) 紅葉山人（尾崎紅葉）「煙霞療養」（初回と第 2 回目は「反古裂織（煙霞療養）」と題されていた。1899（明治 32）年 9 月 1 日から同 11 月 13 日までほぼ毎日、50 回（完）まで連載された。1904（明治 37）年春陽堂から尾崎徳太郎『煙霞療養』として出版されている。
- 63) 讃岐口碑には「啼けばさく聞けば都ぞ忍るゝ、此里過ぎよ山時鳥」とあり、若干文言は異なる。また、この四国漫遊は第 7 節「婚約と結婚」で触れるより江との出会いと関係する。
- 64) 例えば、第三句との関係で第四句が非常に「不都合」だとか。
- 65) 以下の紅葉山人との交友については久保猪之吉「紅葉山人の書簡」（『心の花』第 35 卷第 1 号、1931（昭和 6）年、12、13 頁）による。心温まる思い出話が書かれている。次の引用は 13 頁より。
- 66) 猪之吉は「自分が獨逸について落付いた頃は山人は既に亡くなられたのであつた。即ち明治 36 年 10 月 30 日といふのが山人の忌日である」と書いている（同上、13 頁）。同じところで、「山人の既に不治の難症にかゝりたるを自覚せられ、久保宛に色々な忠告や金言が書かれていて「泣かされた」とある。
- 67) 久保の吉「佐渡が島をおもふ」『こころの華』第 3 卷第 2、1900（明治 33）年、34 頁。
- 68) 常観の『信仰問題』の「付録」に「横浜にて阿兄にわかるゝ時」と題して常音の歌が 3 句と（1 頁）「折々に阿兄をしのびて」と題して、同じく常音の歌 14 句、そして、加えて久保猪之吉の歌 3 句が掲載されている。ここであげていない猪之吉の歌は「二柱親のみことも君をまちて おなじ夢をば見ていますらむ」というもの（37 頁）。
- 69) 近角常観『信仰問題』の「西教事情」に常音による「横浜にて阿兄に別るゝ時」と題して和歌が 3 句掲載されている。また、「米国、英国、仏国、南獨、澳匈連邦」についての詳しい視察記が『政教時報』から転載されている。
- 70) 久保猪之吉「『ベルリン』の友を憶ふ」『明星』12 号、36 頁。この歌は、『こころの華』（第 3 卷第 1、1899（明治 32）年）の「雑詠—東」にも掲載され、「これは近江の人近留（ママ）兄の洋行をおくるとてよめる」と説明がある（22、23 頁）。
- 71) 久保猪之吉「『ベルリン』の友を憶ふ」同上。
- 72) 近角常観、久保猪之吉、丸山環らの書簡、近角常音『書簡抄・法話抄』（山喜房佛書林、1995 年）の「まえがき」。
- 73) 伊藤左千夫、長塚節らは正岡子規に師事し、子規が始めた根岸短歌会の機関紙『馬酔木』や『アカネ』を引き継いだ。常音も『アカネ』の創刊者の一人三井甲之や増田八風との連名で「最近の小説及脚本」（『アカネ』第 1 卷第 1 号、根岸短歌会出版部、明治 41 年 2 月、47、48 頁）、「新年諸雑誌の短歌新体詩小説」（同上、48-51 頁）、また三井甲之との連名で「晶子信綱紫船諸氏の歌を評す」（同、第 1 卷第

- 2号、明治41年3月、20-22頁）と題した評論を書いている。
- 74) 近角常音、同上「まえがき」。
- 75) 1900（明治33）年7月30日付、久保猪之吉差出・近角常観宛、求道会館資料10091。同じ時期に、帰省中の常音宛にハガキが出されていて、歌が3句書かれていた。「恙無く今帰りぬと恙なき／親のみまへにひれ伏すらむぞ。我為めによろしくと申せ父母に／みやこの事を聞えあけむ時。いかつちの宿の主に通れられて／弟は行けり高崎の浜」（1900（明治33）年7月26日付、久保猪之吉差出・近角常音宛官製はがき、求道会館資料9285）
- 76) 1901（明治34）年4月9日付、久保猪之吉差出・近角常観宛、求道会館資料10095。
- 77) 1901（明治34）年6月3日付、久保猪之吉差出・近角常観宛、求道会館資料3232。
- 78) 1901（明治34）年7月27日付、久保猪之吉差出・近角常観宛、求道会館資料3233。
- 79) 正則学校とは1896年に斎藤秀三郎が神田錦町に創立した「正則英語学校」のこと。斎藤は明治、大正を代表する英語学者、教育者で、多くの優れた英文法書を執筆し、また辞書を編纂した。『斎藤和英大辞典』はその例文のユニークさでも有名。「正則」とは当時の旧制高等学校入学を目的とした受験偏重の英語教育に対する批判を込めた命名とされる。
- 80) この書簡の翻刻と解題は拙稿「近角常観の郷土における宗教活動とネットワーク」『立命館国際研究』（31巻2号、2018年）111、112、121、122頁を参照のこと。
- 81) 明治35年1月に出された常音からの書簡（求道会館資料3330）はドイツに送られているが、ドイツに届いた時にはすでに常観は日本に帰朝していたようで、一旦浅草本願寺に返送され、そこから「近江國朝日村延勝寺」の常観宛に転送されている。
- 82) 本稿102頁参照。
- 83) 「兄出発の折に浅草といひしをイヤにて小生方に越したる事」（明治35年1月5日付、久保猪之吉差出・近角常観宛、求道会館資料3239）という事情もあった。また久保からの書簡には、「就きては叔父君に当る竹鼻教円師にもとくと御相談しおきたる事ゆゑ」（求道会館資料3482）とあり、事前に常音については両親ではなく叔父竹鼻に相談するように頼んでいたようで、竹鼻氏とのやりとりの書簡もある。
- 84) 1902（明治35）年1月、近角常音から近角常観宛書簡、求道会館資料3330。
- 85) 1900（明治33）年7月30日付、久保猪之吉差出・近角常観宛書簡。求道会館資料10091。
- 86) ただし、後で見るように、このころ常観に出された書簡では大学に残ることの不安を打ち明けている。第7節「親、兄弟」参照。
- 87) 『岡田和一郎先生伝』岡田和一郎先生伝記刊行会、1942年、206頁。
- 88) 同上。
- 89) 1901（明治34）年4月9日付、久保猪之吉差出・近角常観宛、求道会館資料10095。
- 90) 発会当時は東京耳鼻咽喉科会という名称であった。
- 91) 新編集者として「任に就きて志をいふ」という一文を残している。これは関係者の間では医者としての久保を語る際しばしば引用されるよく知られた一文である。
- 92) 『岡田和一郎先生伝』、248頁。
- 93) 「医人文人あれこれ 長塚節と久保猪之吉（14）」No.1855（昭和34年11月、68頁）。『日本医事新報』No.1485（昭和27年10月25日）に載った「久保猪之吉先生を語る」という座談会の記事から大野喜伊次氏の談話を引いたもの。
- 94) 山本常市「明治百年と日本の耳鼻咽喉科」1968、29頁。（<https://www.jstage.jst.go.jp/article/>

orltokyo1958/11/6/11_6_451/_pdf)

- 95) 『読書の眼』 帝国大学新聞社、1937（昭和12）年、204-209頁。（帝大新聞紙上からの抜粋で、582号に掲載されたもの）
- 96) 1901（明治34）年10月31日付、久保猪之吉差出・近角常観宛、求道会館資料3482。宿直について、より江の「松の内日記」には、明治35年の正月2日のこととして、熱で臥せるより江に「『いかにしつる』のみこえに驚けば、よべ宿直にとて行かせつる君、帰らせ玉へるなり。「何日とならば健なる笑を」のかこち言」とある。（『古ゝろの華』第5巻第3号、23頁）。
- 97) 1902（明治35）年1月5日付、久保猪之吉差出・近角常観宛、求道会館資料3239。
- 98) 後でも少し触れるが、久保は浅草本願寺では新法主と何回か顔を合わせている。光演は書画をよくし、俳画や俳文も多く残している。先にも触れた冊子『星月夜』の表紙を手がけた横山大観と並び称された画家の竹内栖鳳に師事し、一般には俳号の「句仏さん」と親しまれたほど俳諧に優れ、高浜虚子や河東碧梧桐などと親しく付き合い、生涯2万にも及ぶ句を作ったと言われる。浅草本願寺での出会いを通して、久保も文人、俳人としての句仏から、大きな刺激を受けていたと思われる。
- 99) 「紅葉山人の書簡」『心の花』第35巻第1号、1931（昭和6）年、12頁。
- 100) 久保猪之吉「医界時評」、「医界時報」、「時事評論」など。
- 101) 1901（明治34）年10月31日付、久保猪之吉差出・近角常観宛、求道会館資料3482。
- 102) 井田進也「解説」、中江兆民著、井田進也校注『一年有半・続一年有半』改定第1刷、岩波書店、1995年、333-322頁。
- 103) この「藤岡兄」とは言語学者の藤岡勝二である。彼は東京帝大では近角の一級上で、近角らとともに仏教青年会で活躍する同志であった。ちょうどこの年文部省留学生としてドイツのライプツヒヒ大学へ向かうということになっていたため、依頼したもの。藤岡は帰国後は上田万年の後任として東京帝国大学の教授となった。
- 104) 岡田和一郎「一二珍奇ナル食道癌ニ就テ」『日本消化機病理学会雑誌』1巻3号（明治35年3月4日、435-445頁）。岡田はここで中江兆民の詳しい病理報告と診察、解剖報告を書いている。岡田の往診時には気管切開のため兆民は言葉は話せず、石筆と石盤を手にしてなされた。
- 105) 1901（明治34）年4月9日付書簡、求道会館資料10095。
- 106) 「よめぬすみ」は久保より江の短編集『嫁ぬすみ』にある一編（政教社、1925年、81-98頁）。高浜虚子が序文を書き夏目漱石との話もあることで有名。
- 107) 『明星』第15号、1901（明治34）年9月。
- 108) 正式に結婚届けを出す直前の『明星』（第5号、明治35年5月1日）には与謝野晶子の「七日がたり」という短編が掲載されている。文中に3人の女性の写真がはめ込まれている。最初の写真「山川登美子君」と3人目の「高山医学士夫人糸子君」の間に「久保医学士夫人より江君」と紹介された写真があり（33頁）、長い髪を垂らした初々しいより江の姿が残されている。
- 109) 久保と一緒に「文部省外国留学生」として、同じ東京帝大医科大学助手をしていた京都出身の旭憲吉がドイツに行っている（『朝日新聞』、1903年5月27日）。旭は皮膚病学微毒研究のための留学であったが、久保と同じように留学中に京都帝国大福岡医科大学助教授の職を得、久保より数ヶ月前に帰朝したが、すぐに教授となって初代の皮膚病学及微毒学講座を担当し、九州での皮膚科学の基を作った。専門こそ違え、久保と非常に似た経歴の持ち主で、一高から九州大学まで長い付き合いがあったはずである。（旭憲吉については長門谷洋治・坂上俊之「初期の九大皮膚科と旭憲吉教授」『日本医師学雑誌』43（3）、1997年、318-319頁に拠る）。

- 110) 1901 (明治 34) 年 6 月 3 日付、久保猪之吉差出・近角常観宛、求道会館資料 3232。
- 111) 1901 (明治 34) 年 10 月 31 日付、久保猪之吉差出・近角常観宛、求道会館資料 3482。
- 112) 1901 (明治 34) 年 10 月 31 日付、近角常音差出・近角常観宛、求道会館資料 3440。
- 113) 『官報』第 5997 号、1903 (明治 36) 年 6 月 30 日。
- 114) 杉野大沢「医人文人あれこれ 長塚節と久保猪之吉 (13)」『日本医事新報』No.1854、1929 (昭和 34) 年 11 月、68 頁。
- 115) 求道会館資料 3232。
- 116) 柴田浩一の評伝では護躬の上京は 1901 年となっているが、書簡からその一年前であったことがわかる。
- 117) 1900 (明治 33) 年 7 月 30 日付、久保猪之吉差出・近角常観宛、求道会館資料 10091。この書簡では他にも護躬についての記載があり、また別の書簡にも護躬のことが書かれているが、ここでは触れない。
- 118) 求道会館資料 3232。
- 119) 拙稿「近角常観の郷土における宗教活動とネットワーク」に引用している、常観の父母からの書簡などを参照されたい。
- 120) 「医人文人あれこれ 長塚節と久保猪之吉」(14) No.1855、1959 (昭和 34) 年 11 月、63 頁。この大野喜伊次氏の談話は、「久保猪之吉先生を語る」という座談会でのもので、『日本医事新報』1487 号 (昭和 27 年 10 月 25 日発行) に掲載されている。本稿 102 ページで書簡から引用した「小生も此春より開業して登院前二時間位つゝ患者をみる積也、生活上の都合より也」にも注意。
- 121) 柴田浩一『耳鼻咽喉科のパイオニア久保猪之吉』39 頁。
- 122) 1901 (明治 34) 年 4 月 9 日付、久保猪之吉差出・近角常観宛、求道会館資料 10095。
- 123) 1915 (大正 4) 年 10 月 8 日付、久保猪之吉差出・近角常観宛、求道会館資料 6259。
- 124) 例えば、柴田浩一による評伝には「久保家 家系図」が掲載されているが (12 頁)、祖母については表示がない。
- 125) 久保猪之吉「雲水雑記」『政教時報』第 32 号、1900 (明治 33) 年 6 月、14-17 頁。
- 126) 1907 (明治 40) 年 1 月 1 日付、久保より江差出・近角常音宛年賀状、求道会館資料 9342。
- 127) 柳田国男「嫁盗み」『婚姻の話』岩波文庫、2017 年 (1948 年、岩波書店の文庫化したもの)。142-143 頁。
- 128) より江「松の内日記」『こころの華』第 5 巻第 3 号、1902 (明治 35) 年、22-25 頁。
- 129) 妻より江によれば、猪之吉自身「自叙伝を書きたい気があつたらしく、よく幼ない頃の話をした。おまへに話すのは蓄音器に吹きこむ代りだとよくいつてみた」とある。(久保より江「雷の如く」『四三会誌』(久保猪之吉先生追悼号)、四三会、1940 (昭和 15) 年 5 月、4 頁)。実現しなかったのが残念である。
- 130) 岡田による自叙伝は第 10 章「ガルシア 50 年際」で終わっている。
- 131) 岡田和一郎「自叙伝 (1)」『耳鼻咽喉科』第 11 巻第 9 号、耳鼻咽喉科雑誌社、1938 (昭和 13) 年、855-860 頁。同「自叙伝 (2) 遺稿」『耳鼻咽喉科』第 11 巻第 10 号、耳鼻咽喉科雑誌社、1938 (昭和 13) 年、961-968 頁。久保猪之吉「岡田和一郎先生自叙伝のはじめに」『耳鼻咽喉科』第 11 巻第 9 号、耳鼻咽喉科雑誌社、1938 (昭和 13) 年、851-854 頁。
- 132) 久保より江「雷の如く」『四三会誌』、1-6 頁。
- 133) 1940 (昭和 15) 年 2 月 19 日付、久保より江差出・近角常観宛、求道会館資料 4706。

(三宅 正隆、立命館大学国際関係学部教授)

A Story Untold: The Special Bond between Inokichi Kubo and Jokan Chikazumi

Inokichi Kubo was one of the most influential figures in otolaryngology in the early 20th century in Japan. This is partly due to his many pioneering contributions in the field: first professor of otolaryngology at Fukuoka Medical College Kyoto Imperial University (former Kyushu University, School of Medicine), exploration of new surgical procedures and tools in laryngological treatments, editor of medical research journals, profound influence through his role as a teacher and mentor to his students, to mention only a few. During his college years, he also joined a *tanka* verse club, voicing a need to reform *tanka*, and led a revolutionary new *tanka* movement. Biographical stories about Kubo has been told in many journals and books, but one thing about him has been remained uncovered until recently; a friendship with his close colleague Jokan Chikazumi, a Shinshu (True School) Buddhist priest of the Higashi-Honganji Branch. Kubo and Chikazumi, when they were in college, lived in the same place and helped, influencing each other.

In this paper, based on letters from Kubo to Chikazumi in Berlin stored on the Archive of Chikazumi Jokan Research Data Site, some key events in his life during Chikazumi's absence are reported in some detail, shedding special light to their bond which encouraged both of them to lead in each of their professions.

(MIYAKE, Masataka, Professor, College of International Relations, Ritsumeikan University)